

パーク・ホテルにて

「素晴らしい夜景でせう。上海の夜景を見るには、この十四階の『空の舞踏室』が特別観覧席といふ譯なんですよ。僕は上海訪問者で、夜景を見たいといふ人には、必ず此所を紹介するんです」

多田裕計君——小説「長江デルタ」の作者は、さう言つて、上海の夜景を説明してくれる。

群立する摩天樓の頂上に輝く煌々たる電飾は、星の光りを奪ひ、地獄の底のやうな下界の南京路には、無数の夜光蟲が明滅してゐるかのやうに、自動車のヘッド・ライトが光線の尾をひきながら、群衆の雑踏を浮び上らせてゐる。だが、下界の騒音は、流石に十四階の硝子張のキャバレーまでは響いて來なかつた。

綺麗に磨かれたフロアでは、白系ロシアの娘達のシヨウダンスが始まつてゐる。周囲

の卓子には、タキシードを着た歐米人が、豪華なイブニングの婦人達を圍んで、靜かに盃を上げてゐる。

淡い薄紫色の照明が、水の底にゐるやうな落着きを與へてゐるが、部屋は温室のやうな温かさである。

硝子窓の外を、夜霧が音もなく流れてゐる。

「ここに坐つてゐる連中を見ると、支那で戦争が行はれてゐることなんか、全然知らないといふ顔をしてゐますね」

私は窓の外の夜景から、室内の光景に眼を移しながら、多田君にさういふ質問を發せざるを得なかつた。

豪華な設備、柔い音楽、上等のウイスキー……。こんなものが、まだ上海にあつたのだらうか。南昌から飛行機で南京へ歸り、その翌朝、なんとなく急たてられる様な氣持で上海へ着いて、休む暇もなく、このパーク・ホテルへ連れられて來たので、私の頭はたしかに困亂を起してゐるらしい。

「いや、これでも、舞踏室などは寂れた方ですよ。この間引揚げた英國陸戦隊の居た頃は、士官だの紳士連中が、毎夜のやうに歡樂の限りを盡してゐたんですがね。近頃では、租界の外人連中も何となく秋風落莫といった様子です」

「これでもねえ——」

「もつとも、この時間では、上海ではまだ宵の口ですよ」

私は自分の腕時計をのぞき込んだ。針は十時を過ぎてゐる。

「その時計は、日本時間でせう。上海時間では、未だ九時過ぎですよ。上海の歡樂の絶頂は、日本時間にしたら三時か、四時でせうね」

「支那人もですか」

「ひよつとしたら、支那人の方が、夜更しが好きなのかも知れません」

こんな話をしてゐる間に、シヨウダンスは終つて、噓ぶやうなブルースが、バンドから響いて來た。

卓子の歐米人達は、同伴の女達とフロアの中央へ滑り出てくる。

「アメリカ映畫を地で見ると、變んに錯覺を起しさうですよ」

歐米人達は踊りながら、餘り上等でない背廣服でのさばつてゐる私達の方を、ちらちら見て行くのだが、私達は逆に平然と彼等を見返してゐた。

周囲の雰圍氣が、餘りにも私達とは縁遠いものだけに、私達の心に逆の心理作用を起してゐるのかも知れない。それとも、久振りに飲んだハイボールが、馴染みにくい雰圍氣に反撥を起させたのだらう。

「租界内には、依然として抗日重慶政權の鋤奸團なぞいふテロ團體が暗躍してゐるんですか」

「暗躍してゐると見るべきでせう。米英と重慶政權との間には、常に聯絡があるのですから」

「癩ですね」

私達は顔を見合せて、思はず苦笑した。だが、事實はなんとしても事實なのである。私は大陸の各地を歩いて來て、重慶政權に對するよりも、その背後に匿れて糸を引いてゐる

米英の野望を、現地の軍人を始め、色々な人達から聞かされ、又現實にも見せられて来てゐたので、内地を出發する頃の、慌たどしい太平洋の風雲が、一層心魂に徹して感じられるのだつた。いつそ一と思ひに、ぐさツと腫れ上がった箇所へ、メスを突き刺してくれたら——と、勝手なことを考へてゐたのだが、現實に上海の米英租界を見て、私は一層さうした感情に捕はれてしまつたらしい。

「何時までゐても限りがなささうですね」

「ちや、そろそろ歸りませうか」

フロアーでは、プログラムによると、新歸朝の奇術家と稱する支那人の奇術師が、曲藝の如きものを演じてゐる。妙に氣取つたタキシード姿の、奇術師の無表情な顔が、歐米化した支那人のタイプを、露骨に見せてゐて不愉快だつた。

「さア、出ませう」

私達が卓子を離れようとした時に、五六人の支那人の男女が、賑やかな話聲とともに入つて來ると、私達の卓子の隣に席を占めた。女達の着てゐる朱色の緞子だの、淡綠色の毛

織の支那服の鮮やかな色彩が、今まで白と黒の夜會服ばかりの中に、パツと大輪の花を咲かせたやうな強い印象を、私達にあたへた。

綺麗に揃へて剪つた前髪の漆黒さが、心もち上氣した額に垂れて、緑や赤の耳飾が、小さな耳に、妖しい美しさで光つてゐる。——ポール・モーランの「夜ひらく」といふ小説の題名が、突嗟に私の記憶を甦らせたほど、彼女達は婀娜な美しさを見せてゐた。

「支那映畫の女優たちですよ」

さういへば、彼女達のパートナーの男達は、いづれも極端にアメリカ化した格好をしてゐる。

「彼等の歡樂は、これから始まるといふ譯ですね」

私達はエレベーターで、一氣に階下に降りて來て、ホテルの廻轉扉を押した。

十二月の冷たい夜氣が、急に身に沁みだした。十四階のホテルの、硝子張の舞踏室から見た南京路は、雑踏の響もなく、夜光蟲の光る海のやうに見えたが、ホテルの扉を境にして、路上には雑踏と喧燥とが、夜霧の中で渦を卷いてゐた。

日本時間では、もう十一時過ぎだといふのに、南京路の雑踏は何時果てるもしれない
混雑さなのである。歩道には、支那の乞食が、冷たいコンクリートの上に寝そべつて、往
來の人の袖にすがつてゐる。——支那の乞食を見て、私はいつも不思議に思ふのだが、日
本の乞食の如く、決して路傍に坐つてゐないで、長々と寝そべつてゐるか、執拗に追ひか
けるかの二種類なのである。

私達は人混みを擦りぬけるやうにして、新世界の附近まで來た。

「上海名物の乞食と野鷄——夜の女ですよ。ここからが難關なのです」

煌々たるネオン・サインが、白晝のやうな輝きを見せてゐる街の一角に、野鷄が、關所
の番人のやうに目白押しに立つてゐる。

こんな支那があるかと思へば、パーク・ホテルの硝子張の中にも支那がある。いや、あ
の高層のホテルの中にあるのは、支那ではなくて米英なのだらう。

私達は二階バスに乗つて、雑踏する夜の南京路を車窓から眺めながら、四川路まで歸つ
て來た。

私は虹口への橋を渡りながら、一種の緊張感が身體から脱けて行くのを、強く感じてゐ
た。

「橋を渡つたら、理由もなくほつとしましたよ」

虹口側は、米英租界から歸つてみると、人影もなく、ひっそりとしてゐる。街角のユダ
ヤ人經營の喫茶店が一軒だけ起きてゐて、暗い街路に明るい影を見せてゐた

「お茶でも飲んで歸りませう」

喫茶店のストロブの側で、温い紅茶を飲みながら、私は多田君に言つた。

「今日の半日の印象では、はつきりしたことは分りませんが、上海はやはり魔都といつた
感じがしますよ」

多田君は微笑してゐて、別に答へなかつた。私達は間もなく別れて、宿舍へ歸つたのだ
が、疲れてゐるくせに、妙に頭ばかり冴えて睡れさうにもなかつたので、晝間、街の本屋
で買った繪入りの上海案内の如き本の頁を繰つてゐるうちに、「血の横町」といふ章にぶ
つかつた。

「血の横町」——つまり喧嘩小路なのだが、上海の租界らしい挿話だといへるだらう。「血の横町」は、正確にいへば佛蘭西租界の朱葆小路といふ小さな横町なのだが、船員相手の酒場が軒を並べてゐて、船員達の喧嘩の絶え間がないといふ物騒な横町らしい。

世界各国の船が入港するので、喧嘩も従つて派手に、國際的なものになつてくるのである。——そして、この本には、各國人の喧嘩の特徴が書かれてゐる。

喧嘩の常習犯は英國人と米國人で、この兩國の水夫達は、好んで拳闘をやりたいが。だが、彼等の喧嘩は酒場の喧嘩に、型のいいところを見せたがる傾向がある。

伊太利と、佛蘭西の水夫達は、何かといふと、直ぐにナイフを振り舞うので、非常に毛嫌ひされてゐる。

そして、面白いことには、日本の水夫達は、ビール場投げの名人だが、野球の上手なアメリカの水夫達には、適用しない。

——と、書いてある。だが、柔道にかゝつては、いくら野球の上手なアメリカの水夫達でも、ぐうの音も出ないと書いてないのは、この本の筆者の認識不足だらう。

面白いのは、英國人や米國人は、喧嘩をするにもわいわい囃したてゝ、酒場を拳闘の練習場と心得てゐるらしいが、そこへ第三國の船員が現れると、直ぐに攻守同盟を結んでしまつて、第三國の船員を酒場から追ひ出してしまふといふのである。

前世界大戦でも、今度の歐洲大戦でも、米英は直ぐに攻守同盟を結んで、獨逸に抗戦してゐるのが、この本を讀んでゐて、成程といふ氣がした。

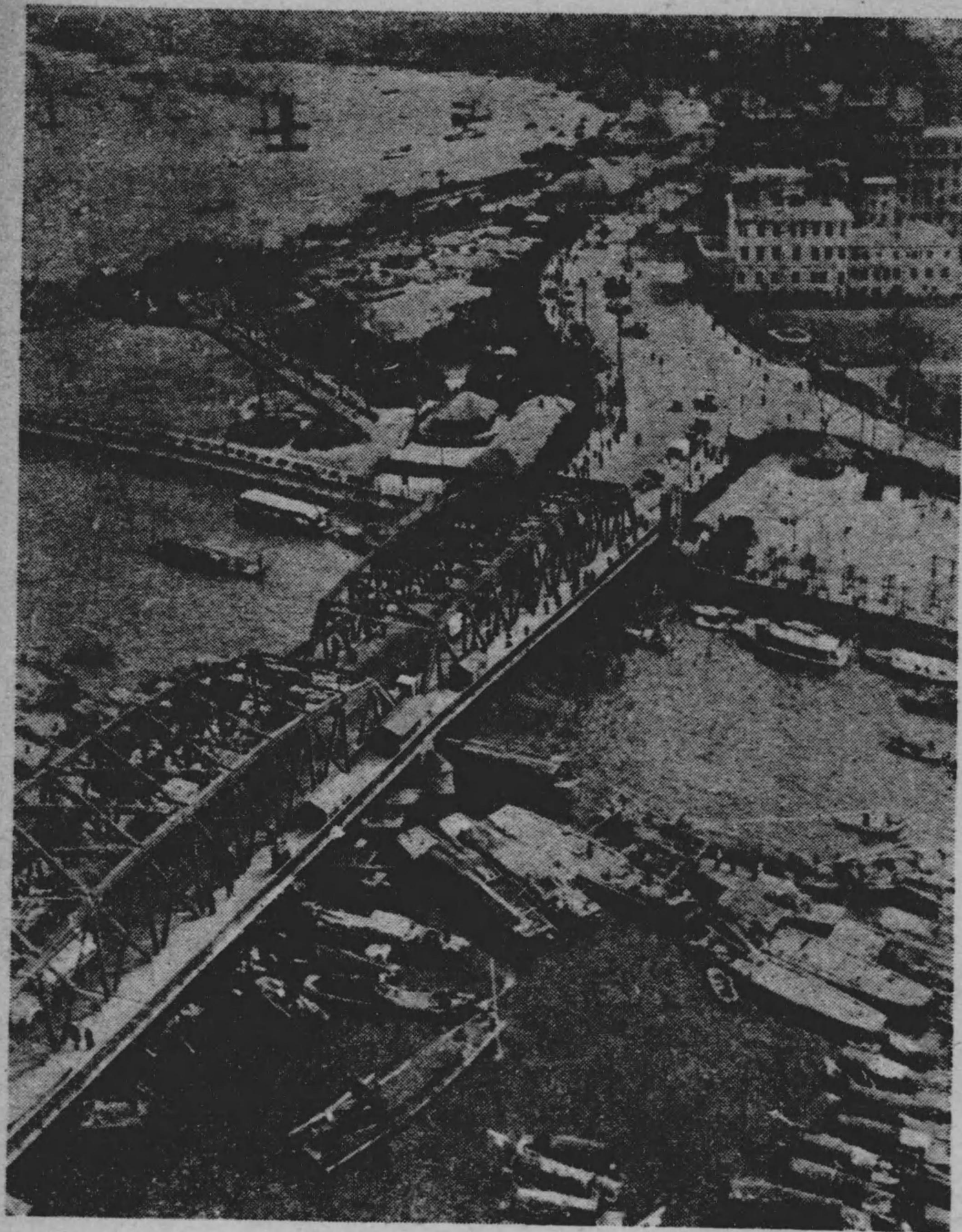
上海でも、米英租界は境界を撤廢して、日本に對抗してゐる。船員達の酒場の喧嘩の話だが、何か奇妙な暗示に富む文章なので、私は臆方近くまで讀み耽けつたのだつた。

上海の橋

鐵骨のガーデン・ブリッジ（外白渡橋）が、ブロードウェイ・マンションの赤褐色の巨大な影に、橋の片側を翳らせ、黄濁した黄浦江岸に停泊せる無数の戎克や汽船の橋頭を、鐵骨の間からのぞかせてゐる。

蘇州河は上流から幾つかの橋の下を流れて、ガーデン・ブリッジの下をくゞつて、始めて黄浦江にそゞいでゐるのだが、この小さな河を隔てゝ、日本租界の虹口と米・英租界が對峙してゐる。

日本租界と米・英租界との交通は、主としてガーデン・ブリッジ、白渡橋、四川路橋で通じてゐる。日本租界が蔣介石軍の包圍を受けて、到るところに、未だに彈痕をとゞめ、凄惨な事變當初の面影を偲ばせてゐるのに、小さな蘇州河を越へると、米・英租界は依然として豪華な偉容を見せてゐるのである。



た見りよンヨシンマ・イエウドーロブ
灘浦黄とヂツリブ・ンデーガ

黄浦江岸のペブリック・ガーデンの側の景勝の地には、赤練瓦の英國總領事館が、屋上にユニオン・ジャックの旗を靡びかせ、鐵の門扉には、金色燦然たる英國の紋章を光らせて建つてゐる。

前世界大戰を記念する平和記念塔の上には、鐵製の平和の女神像が、冷たい表情で、黄浦灘路を往來する自動車や電車や黄包車を眺めてゐる。江岸の堂々たる石造の建築物は、揚子江を遡江して來る汽船から見ると、上海が世界的な港であることを肯づかせるに充分であらう。

——私はなにも、今さらのやうに上海の外観の説明をする氣はないのだが、支那からの共同租借地たる上海が、支那で最も大きな都會であるといふことに、奇妙な錯覺を感じさせられてゐるのだ。外國風な石造の大建築物は、様々な建築様式を見せて、江岸を壓してゐるが、この土地の住民たる支那人は、堂々たる建築物の持主たる米英人の奴隸の如き地位にあるのが、私には不思議なのである。或は奴隸ではないと抗辯するかも知れないが、奴隸でなければ、米英の操つる手先に踊らせられてゐる傀儡としか思はれないのである。

私は大陸の各地を歩いて来て、最後に上海へ着き、租界を歩けば歩くほど、この感を一層深くするばかりであつた。事實、上海ほど露骨に米英色を見せてゐる場所もないからであらう。

天津、北京にも、まだ米英租界は在つたが、上海ほどの激しい敵意は感じなかつた。支の九江、漢口などは、既に米英人は引揚げてしまつてゐて、その租界もうらぶれた姿しか残してゐなかつたが、上海には底の知れない敵意が、租界の街角や露路の奥に潜んでゐるやうな雰圍氣を漾はしてゐる。

「……だが、これでも静かになつた方ですよ。英國陸戦隊やアメリカ・マリン（海兵）がゐたところは、支那人どもまで鼻息が荒くて、うっかり租界は歩けなかつたものです」

上海在住の人々の述懐である。

黄浦江には、軍艦出雲が灰色のどつしりした偉容を見せてゐて、鮮やかな旭日旗が川風にはためいてゐる。浦東側に停泊してゐる米英の二隻の砲艦の、眞白に化粧した様子は、出雲の偉容に比較すると、全く玩具の軍艦でしかない。

蘇州河を渡つて、所謂河向ふの米英租界を歩いてゐると、激しい敵意の如きものを感じるが、一面には底知れぬ憂鬱な翳のさしてゐるのが感じられる。

米英の領事館はいふまでもなく、彼等の權益といふ權益には、物々しい旗を樹てたり、仰々しくペンキで旗印を描いたりしてゐるが、今では空しい最後の擬態を示してゐるとより他には思へない感じである。

蘇州河の小さな河を隔てて、上海の街の性格はくつきりと區別されてゐる。橋は懸けられてはゐるものの、この橋には生命がないと言へるだらう。米英にとつては、橋などは無用の長物なのだらう。と同時に、彼等はこの橋を、租界を護る唯一の境界としてゐるのだともいへるのである。

米英租界の連中は、上海から、支那全土から、武漢三鎮が攻略され、南京政府が樹立されて、蒋介石が奥地へ敗走してしまつた今日になつても、日本の勢力を、上海から驅逐しようとして、醜い悪あがきをしてゐるとしか思へない。

彼等にとつては、二三枚のポンド紙幣やドル紙幣が、一〇〇〇元に換算される上海から

本國へ歸へるなどといふことは、夢にも想像のできぬことなのだらう。だが、現實の厳しさは、彼等の脚下を揺がし始めてゐる。それだけに植民地としての支那への未練から、尙一層ぬけ切れなくなつて來るのかも知れない。

本國へ歸れば、上海での豪華な生活などは想像にも及ばないといふのが、支那在住の米英人の眞意であらう。支那人の給仕、料理人、阿媽を、安い給料で顎の先で使ひ廻し、チャイニーズ・ワイフを圍つてゐられるのも、支那といふ植民地での、彼等の特權だと考へて、過去百年間を過して來たのである。

——上海。上海は素適スウツトだつたわ。どうしてつて、面白い様にお金が儲かつたからよ。でも、もう駄目よ。だつて、ドル箱がなくなつたんですもの。

南京の夫子廟の舞踏場へ、上海から流れて來たといふどぎついアメリカ風の化粧をした姑娘が、上海の凋落を悪達者なビジョン・イングリシユで嘆いてゐたが、上海碼頭で、彼女達が戀人——といふと體裁はいゝが、パトロン——の米國陸戰隊や英國陸戰隊の兵士達の前で流した涙は、ポンドやドルへの袂別の泪だつたといふのが、偽らざる告白かもしれ

ない。

とすれば、米英租界の英國風の豪壯な建物や、米國流の摩天樓は、彼等が揚子江の三角洲に築いた砂上の樓閣であつたのである。しかし、尠なくとも支那の文化人ともいふべき男女が、今日、彼等だけの會話に於ても、英語を用ひてゐるといふ事實を看過してはならないと思ふ。もちろん、廣大な支那大陸では、北支、中支、南支では、全然言葉が通じないといふものの、英語が彼等の意思を通じさせるといふことは、そこまで米英の勢力が浸透してゐると言へるだらう。

だが、米英が支那の搾取によつて築き上げた桃源郷は、如何に巧妙に隱蔽しようとしても、所詮は崩壊をまぬがれないのだ。僅か數十年の間に、幾度か支那が、米英の羈絆を脱しようとして抵抗を試みたことを、支那の歴史が物語つてゐる。だが、米英の謀略は、その都度、銚先を他へ轉ぜしめて來た。

最近の歴史では、その銚先が、常に日本を對照として向けられてゐたのである。

虹口側——蘇州河の北方の日本租界が、その事實を物語つてゐる。

上海北停車場附近から楊樹浦方面にかけて、われわれは至る處に、我が陸戦隊の猛攻死闘を偲ぶ戦場を見ることが出来る。陸軍部隊が敵前上陸した吳淞、江灣鎮、大場鎮、眞如などの戦場が、今日でも當時の物凄い弾痕をとどめてゐるのである。

——長崎縣上海市で郵便物が届いたなどといふ笑ひ話が傳へられるほど、上海は日本にとつては至近の距離にありながら、日本人と支那人とは、常に反目してゐるといふのは、なんとも、理解の出来ぬことのやうに思はれる。だが、この理解の出来ぬ謎の、解決の鍵を河向ふの支配者達が、ガツチリ握りしめてゐるからなのである。

河向ふから虹口側へ歸つて來ると、われわれは、ほつと安堵に似た氣持を味合されるのだが、これは日本提灯をぶら下げた小料理やとか、繩のれんのおでんやが軒をならべてゐて、黄包車の上に藝妓の姿を發見したり、大阪式のカフェーが騒々しい景氣を見せてゐたりするからでは、決してないのである。たゞ、日本人の居住地區であるといふだけで、一種の安堵を感じるのであらう。これは單に上海に限つたことではなく、大陸の各地で見られる光景かも知れないが、上海ほど、彼我の對象が尖鋭化してゐないだけに、私達の心に

迫つて來ないのかも知れない。だが、上海では、かうした卑俗な日本租界の形相が、私などには、異様に反撥してくるのである。

——なるほど、長崎縣上海市か！

しかし、そんな嘆息を洩したぐらゐではすまされぬものを、私などは上海の日本租界から感じさせられる。

我が陸海軍が死を賭して護つた日本租界の河向ふには、支那事變の張本人たる米英が、自畫公然とユニオン・ジャツクを、星條旗を、巨人の群像のやうな摩天樓の頂上に翻へしてゐるのだ。

蘇州河は、上海に於ては、大きな國境となつてゐる。

河向ふと虹口側とでは、劃然と性格を異にしてゐるのだ。大東亞建設を目的とする日本と、支那を搾取のための植民地と觀する英米とでは、餘りに性格が異りすぎてゐる。

われわれにとつて、蘇州河の橋は、大東亞建設の癌を爰除するための進撃路でなければならぬのだ。

私は映畫「上海」のフィルムの一駒を、はつきりと記憶してゐる。

上海市街戦で、最も激烈な戦闘だつた四行倉庫の、砲弾に破壊された壁の大きな穴から撮影された場面で、穴の向ふを、英國の警備兵が煙草をふかしながら、呑氣な顔付をして四、五人、行つたり來たりして、警備してゐるのである。

しかも、この四行倉庫を陣地として、日本軍に抵抗した支那兵に、英國兵が糧食を供給してゐた事實を、カメラは歴然と撮影してゐた。その上、支那兵は脱出に際しても、英租界へ脱けて行つたのであるが、それを英國軍は黙許したばかりでなく、援助さへしてゐるのである。

私は四川路橋畔に立つて、皇軍の將兵に、幾度か悲憤の涙を流さしたであらう河向ふの米・英租界に翻へる國旗を見ながら、この橋を突破する日が、果して何日來るであらうかと考へたのである。

蘇州河は、日本と米・英とが橋によつて繋がれた國境である。

楊樹浦のユダヤ人

支那街の朝は——正確にいへば、共同租界のA地區（英租界）——夥しい群衆で、溢れてゐた。

朝の爽々しい太陽の下で見る支那街には、晝間の雑踏もなく、夜の喧燥さも、さほど強くは感じられないが、路傍の屋臺店の鍋の中に、温い粥が湯氣を立てゝゐて、茶碗と長い箸を持つた男や黄包車の車夫が、立つたまま、食事をしてゐる。その側で、子供が往來の人を見ながら、のんびりと小さなお尻を出して便を足してゐる。

支那人の家屋には厠といふものがないのであらうか。何處へ行つても、こんな光景を目撃するところから見ると、たしかに厠はないらしい。

どの店舗も、店は開いてはゐるが、まだ商賣にはかゝつてゐないらしい。例のゆつくりした調子で、派手な花模様の洗面器で、手の方は動かさずに、顔をタオルの中で動かした

がら、洗面をしたり、齒を磨いたりしてゐる光景が、どの店先にも見られるのである。

朝の太陽は、この街の片側を明るく照し出してゐる。どの通りを歩いて見ても、全く同様な光景が、路傍に見られるのである。さうした通りの一つで、私の友人はふと足をとどめると、私に眼で合圖をした。

この通りも、今まで私達が歩いて來た通りと、少しも變つたところのない街だが、私の眼は街の片側に、この街とは縁の遠い人間が、一臺の荷車の側に立つて、盛んに身振り手振りで、何か喚いてゐる姿に牽きつけられたのである。

荷車の周囲には、粥の茶碗をかゝへたまゝの黄包車曳きや、齒ブラツシを銜へた男や、買物籠を持つた女達が群つてゐた。

「あれだよ。君の質問への答へは」

今朝早く、友人が私を引つばつて共同租界へ連れて來たのは、支那粥を食はせるのでもなければ、朝の佛蘭西租界の散歩に誘つたのでもない。

昨夜、上海の話聞いてゐて、

「例の獨逸を追放されて上海へ來たユダヤ人達は、どうして生活してゐるのか」

といふ私の質問に答へて、彼等の生活の實況を見せてやらうといふので、朝早くから租界の支那街へ引つばつて來たのである。

荷車の側の、薄汚れた皮のジャンパーを着た外人は、色褪せた烏打帽を阿彌陀にかぶつて、鷲鼻の頭を赤くしながら、盛んに何か喋つてゐる。それは片語の支那語と英語との、不思議な言葉だつた。

荷車の側の外人——ユダヤ人は何をしてゐるのであらうか。

私達は荷車を圍んで群がつてゐる支那人達の間から、荷車の上をのぞき込んだ。荷車の上には、澤山のメリヤスのシャツやタオルが、安價な齒ブラシや石鹼などに混つて、山のように積み込まれてゐるのである。こんな品物ならば、この支那街の、どの店頭にもごろごろしてゐる品と同じ品である。だが、この荷車の上の品物が、全く文字通りに飛ぶやうに賣れて行のである。

これは何うした事なのであらう。商賣にかけては、天才的な商根をもつてゐる支那人達

が、この不敵な異國の行商人の品物に、眼の色を變へて飛びついて行く光景は、私などは、全く奇妙に映るのである。

「これが、奴等ユダヤ人の生活だよ。恐るべき生活力とでもいふべきだらう」

荷車の側を離れて歩き出しながら、友人はもう一度振り返へつて、私にさう言ふのだ。

「奴等は楊樹浦から荷車を引つばつて、早朝に出かけて來るんだよ」

楊樹浦のユダヤ人——このふてぶてしい商根を發揮する獨逸系ユダヤ人の、これはほんの一面にしか過ぎないのだ。

「夜は楊樹浦の酒場をのぞいて見るんだね。晝の間は、荷車を引つばつて商賣をしてゐる奴等が、夜はどんな商賣をやつてゐるか、興味ある話題だよ」

私達は、いつか南京路の雑踏する舗道を歩いてゐた。

彷徨へるユダヤ人——だが、國を失つた彼等は、歐米各國に根強い巢を張つて、世界の金融を獨占し、米・英を指嗾し、ソ聯を操つて、戰爭を勃發せしめた張本人なのだ。

この上海でも、虹口側の楊樹浦に、獨逸を追はれたユダヤ人が辿りついたのは、ほんの

一、二年前でしかない。

楊樹浦——われわれは、この地名を忘れることはできない。我が海軍特別陸戰隊が、上海を包圍せる百萬の蔣介石軍を相手に、寡兵をもつて猛撃死闘し、敵をして一步も日本租界に近づけなかつた血の戰場として、われわれの記憶に生々しい。

砲撃に碎かれ、戦火に焚かれた楊樹浦は、黃浦江沿岸附近の僅かな建物を残して、瓦礫は飛散し、今だに彈痕をとどめた建物が、灰燼の中にぼつんと残つてゐて、人影もあまり見かけない光景には、鬼哭啾々たるものがある。

その夜、私は虹口クリークの陸戰隊の歩哨所の前を通つて、楊樹浦を見に行つた。広い道路の兩側には、佗びしい電燈がところどころに點いてゐるだけで、しばらくの間は人家はあるにはあるが、音もなく闇の中に沈んでゐて、人影も見えない。

「これは大變なところだね」

虹口側の賑やかな明るい街から來ると、この暗さは強く心に堪へる。

「暗いだらう。だが……もう直きだよ」

友人は皮肉な微笑を浮べる。

「どうだ、あれは」

廢墟のやうな街並みの端れに、一ところ明るいネオンサインが、煌々として街路を照してゐるところがある。

眩ゆいばかりの明るさが、舗装道路の上に流れてゐて、片側には倉庫の如き建物が、ぼつんぼつんと建つてゐる。背後は雑草の茂つた空地で、漆黒の暗につままれてゐるのだ。

「どうだい。これが奴等ユダヤ人の夜の巢だよ」

私達は、明るいネオンサインの光の流の中に立つた。

黄浦江沿ひの一角に、五、六軒のキャバレーが軒をならべてゐて、扉の前にはマフラーを首に巻いたアパツシユのやうな男が立つてゐる。

「ハロウ・ミスター」

私達が近づいて行くと、この男達は怪しげな英語で呼びかて、卑屈な微笑を浮べながら

われわれを誘ふのだ。

扉の内部からは、柔い樂の音がもれて来る。

「どうだ、ちよいと入つて見るか。この客引き野郎共が、晝間見たやうに租界へ商賣に出かけるんだよ」

私達は一軒のキャバレーの扉を押した。

「ウエルカム」

獨逸訛の英語といふものは、耳馴れないのでエキゾチックに響く。明るい音樂の旋律が流れる様に聞えてゐたので、キャバレーの内部は賑やかなのであらう、と思つたのに反して、客らしきものの姿はなく、壁側の椅子にかけてゐた四、五人の若い娘達が、私達の姿を見ると、直ぐに立ち上つて、滾れるやうな笑顔を見せて近づいて来るのだ。

「閑古鳥でも啼きさうだな」

私達は一隅のソファに腰を下ろした。このキャバレーは、二十疊ぐらゐの廣さで、中央に舞踏場があつて、奥のスタンドの背後には、ずらりと酒瓶が並べられてゐる。

照明も外部の明るさと比較すると、むしろ薄暗い。入口の右隅が少しばかり高くなつてゐて、ピアノとバイオリンとセロとの三重奏を演つてゐる。

その樂師達は、私達の顔を見ると、今まで演奏してゐた獨逸風のタンゴを中止して、日本の流行歌を演奏しはじめた。

「あれが歓迎歌といふ譯だね」

私達はビールを注文した。娘達はいづれも若々しく、綺麗である——獨逸の血が混ちつてゐるらしい美しさである。

「どうだ相當なメツチエンだらう」

娘達はメツチエンといふ言葉に、ニコリして見せる。

「だが、この娘達も年が寄ると、あのスタンドにゐる婆さんのやうになるんだからね」

友達の言葉に、スタンドの方を見ると、おそろしく肥満したビヤ樽のやうな體格の婆さんが、私達の方を見て愛嬌笑ひをしてゐる。

この綺麗な娘たちと、あの醜惡なビヤ樽のやうな婆さんとを結びつけることは、かうで

も對照して見なければ、直ぐには理解できないほどの違いである。だが、娘達の中にも、そろそろさうした傾向を見せてゐる娘もゐた。

娘達は流暢な英語で、われわれに愛嬌をふり撒いて、ビールを勧める。樂師達は彼等の知つてゐる限りの日本の歌を演奏すると、今度は手段が盡きたといふやうな顔付をして、獨逸の民謡だの、ジャズを演りはじめる。

とにかく、上海へ着いて、一年か二年にしかならないのに、このユダヤ人達は英語を喋べるのである。この點から見ても、彼等の生きんがための執着力とでもいふべき、生活力の逞しさが分るのである。

虹口側に生活の根を下ろし、ここを根據として、楊樹浦の戦火に荒れた廢墟の如き一隅にまで、チリチリと彼等の生活力を浸入させようとしてゐるのだ。

昨日まで、虹口側の支那人の店だつた家が、今日はユダヤ人の酒場や割烹店レストランに變化してゐるなどといふことも珍らしくないといふ。事實、北四川路の大通り近くまで、彼等の店が顔を見せはじめてゐる。

彼等にとつては、虹口側などよりも、蘇州河を越へて、米・英の共同租界にまで、彼等の勢力を及ぼさうと考へてゐるのであらう。

「僕なんかは、このまゝの状態をつゞけてゐたら、上海はユダヤ人の世界になりはしないかと思ふことがあるよ。もちろん、そんなことになつたら大變だがね」

國を失つた民族、世界を放浪する民族たるユダヤ人にとつては、彼等の生活する土地そのものが、彼等の祖國なのであらう。彼等はその土地に根を張つて、彼等の樂園を築き、巨大な資本力に物を言はせて、世界制覇を夢見てゐるのだ。

前世界大戦も、今次の歐洲大戦も、米・英のユダヤ人達が、露骨に彼等の意思を表現したものとといへるだらう。

「……このユダヤ人達が上海へ着いて、直ぐにやつたことで面白いことがあるんだ。君は獨逸から追放され、一團となつて纏つた金もなく上海へ着いたとしたら何うするか。土地不案内な場所で職もなく、所持金もなくなれば、どうして食つて行くかね。先づ乞食をするより他に手段はないと思ふだらう。ところが、このユダヤ人達は——獨逸を追放され

て來た彼等は、先づ第一に共同炊事にとりかゝつたんだ。材料も澤山に仕入れ、ば格安につくし、時間的にも經濟だと考へたんだ。次には、共同資本によつて商品を仕入れる。彼等は凡ゆる點で合理的なのだ。こんな點から見ると、この獨逸的ユダヤ人は、他の國に住んでゐたユダヤ人よりは、獨逸的だといへるだらう」

そして、彼等は次第に彼等の地盤を擴大し、虹口側の繁華街を蠶喰しつゝあるのである。

——アナタ、オドリマス、オドリマセン。

この娘達は、片言ながら日本語まで喋るのである。

「いや、呆れたね」

——ナニ、ワラフ。

このやうに、凡ゆる國々の言葉を、片言であらうが、何んであらうが、自由に驅使する力といふのは、彼等の祖先からの悲しき遺産なのであらう。彼等の祖先達は、國を失つて世界の果てまで、彷徨につゞに彷徨をつゞけ、國々によつて、生きんがために、その國の

言語を習得しなければならなかつた。そして、それが彼等の第二の天性になつてしまつたのだと考へるのは誤りであらうか。

「ドイツ、イイクニダネ」

友人は側の娘に、ゆつくりと日本語で訊いた。娘は笑顔を見せた。

「サウ、イイクニ」

「面白い話があるんだ。ユダヤ人仲間でも、英系だの、米系だの、この連中のやうに獨逸系だのとあるんだが、例へば英系のユダヤ人が獨逸の悪口を言ふとだね。この連中がかんかんになつて怒るといふのだよ。獨逸を追放されたユダヤ人が、獨逸の悪口を言はれると怒るといふのは、ちよつと考へると不思議だが、矢張り生れ故郷といふやつなのだらうね」

私は獨逸の悪口を言はれると怒るといふ獨逸系ユダヤ人の顔を、あらためて見直した。

「獨逸の歌でも唄はないか」

娘達はにつこり笑ふと、樂師達に口々に、何ごとか呼びかけた。やがて静かなワルツ風の旋律が流れ出すと、美しい聲で二部合唱を始め出したのである。

十二月の冷たい風が、黄浦江の上を吹いて、廣い舗道を吹きまくる。そして、バラック建も同様なキャバレーの扉を揺すぶつて行く。

扉を押して外へ出ると、周囲は漆黒の闇に吞まれてゐて、遠く北四路あたりでもあらうか、ほのかに街の燈が、夜空に映えてゐるのが見えた。

——楊樹浦のユダヤ人が、將來どういふ運命の下に置かれるかといふことは、われわれの關知したことはないかもしれぬが、雑草の如き根強さを持つたユダヤ人を、どう處置すべきかは、少くとも上海に於ては、大きな問題となつてくるのではなからうか。



二十日十月二十日米系有力映畫館キ
 シーは皇軍の歴史進駐ニユースを
 上映すに情勢は變化した

大光明戲院にて

客席の電燈が消えると、スクリーンには極彩色の廣告が、軽快なレコードの音楽につれて、次々に現れてくる。それは租界内の、各種の商店の宣傳廣告なのだが、日本の映畫館で見るやうな幻燈まがひの代物とは違つて、確かにフィルムを使用してゐるらしい。廣告は廣告だが、極彩色ではあるし、いろいろと千變萬化するので楽しい。だが、この廣告映畫の製作は支那人の仕事ではないらしいが、スクリーンに現れる廣告の意匠や文字は、如何にも支那式なのである。

廣告映畫は五分間もつゞいたであらう。だが、私は、この廣告映畫を通じて、租界の形相をちよつぱりだが、のぞいたやうな氣がした。

私は中華映畫の長谷川君を無理に案内役として、租界の映畫館を見物にやつて來たのである。

パーク、ホテルの近くのグラウンド（大光明戲院）は、立派な映畫館である。廊下には厚い絨氈が敷かれてゐて、しつとりと落ちてゐる。開場の五分前ぐらゐだつたが、もう相當の観客が詰めかけてゐる。だが、日本映畫館のやうに喧燥ではない。

支那人の饒舌と喧燥さに惱まされつゞけてゐたので、私はこの映畫館での靜肅さが、いささか不思議だつた。

「割に靜肅なものですな」

「——と思ふでせう。ところが、何に原因があると思ひます。この靜肅なのは」
長谷川君は不思議なことを言ふのである。私は周圍を見廻したが、別に原因といふべきものも發見できなかつた。

「下駄がないんですよ、下駄が。日本の映畫館の騒々しさの責任は下駄にあるんですよ」
——なるほど、と私は感心した。ここでは靴か、柔い支那靴ばかりである。厚い絨氈を敷いてゐても、別に心配はない譯である。

客席も連鎖式の坐席には變りはないが、悠つたりとして氣持ちがよい。

観客の大部分は、支那人の男女であるが、ほとんど若い男女ばかりで、外人の姿もチラホラ見えてゐる。米國の海兵が、派手な軍服姿で、支那の姑娘と腕を組んで入つて來るのが見られた。

極彩色の廣告映畫が終ると、スクリーンに「ネエビイ・ブルウ」が映寫された。ジヤック・オーキーとマーサ・レイが、素頓狂な顔をして、巫山戯ちらすアメリカ海軍の宣傳用娛樂映畫なのである。極端にレヴェウ化された映畫で、嘔吐を催させられるやうな莫迦々々しさを感ぜられる。

——こんな映畫を、私達は昨日まで面白がつて見てゐたのであらうか。それにしては、何うして、こんな不愉快さを感じるのだらう。大陸の各地で、事毎に米英の露骨な敵性をまさまさと見せつけられて來たために、私の昨日までの考へ方が變化を來たしたのかも知れない。米英の敵性といふことは、雑誌や新聞でも察知してゐたが、現實に眼や身體や心で觸れてみるまでは、實感となつて來なかつたのであらう。

だが、今は違ふ。昨日までの私は、もう今日の私とは、あらゆる點で違つてゐるのであ

る。大陸の現實が、切實に、私にそのことを教へてくれたのである。

映畫は、日本で上映される時のやうなスパー・インポーズもないので、私などにはやうやく記憶にある單語が分る程度なのだが、この観客席の支那人達は、このトーキーの英語を充分に理解してゐるらしい。笑ふべき個所になれば、彼等は大聲で笑ふし、苦笑するところでは、苦笑を洩してゐる。

これは、上海の支那人だけに見られる現象なのだらうか。いや、私は漢口でも、南京でも、支那の知識階級といはれる人達が、實に流暢に、英語を自國語の如くに操つるのを知つてゐる。

——アメリカ人は行進が好きだ——この批評には確實性がある。行進の好きなアメリカ人は、従つてレヴェウが好きらしい。アメリカの陸海軍の觀兵式は、確かにレヴェウ化してゐる。

この「ネエヴィイ・ブルウ」でも、盛んにレヴェウが——パレードが現れて來る。それにしても、映畫の力は恐ろしい。客席の支那人の男女達は、映畫の戀愛を現實で行つて見せ

るのである。殊に米國海兵などと手を組んで現れた姑娘などは、衆人環視の中で、如何に薄暗い客席とはいへ、平然とスクリーンと歩調を合せて、戀愛行動におよぶのだから、こんなことを見馴れない私などは、逆に赤面するばかりである。

——上海は東洋なのだらうか？ 西洋なのだらうか？

映畫のもつ宣傳性の重大さを、われわれは充分に見極めなければならぬ。支那人の肉體を蝕み、精神を傷つけて、遂には支那全土を、米英の植民地化さしめた阿片にかはつて、今日の支那の青年層を蝕みつゝあるのは、アメリカ映畫であるといつても過言ではなだらう。——日本でも昨日までは、こんな状態でなかつたとは言へぬ。

だが、一方では、映畫もまた鋭い近代武器として登場しつゝある。支那全土の皇軍の作戦地區に、支那民衆の宣撫工作の武器として、映畫は前線にまで進出してゐる。

中支方面では中華映畫巡迴映畫班が、軍の要望に應へて、前線の皇軍將兵の慰問に、民衆の宣撫工作に、寧日なき活動をつとけてゐて、既に尊い犠牲者まで出してゐるのである。

私はこゝで巡迴映畫班の活動状況を報告する餘裕は持つてゐないが、映畫のほんたうの使命は、こゝにあるのではないかと考へる。

私と席をならべて坐つてゐる長谷川君も、巡迴映畫班の一人なのだ。今日、暢氣に私を案内してくれてゐるが、命令があれば重い映寫機やフィルム罐を擔いで、前線の皇軍慰問に出發するのだし、敵地區を突破して宣撫工作へと出動して行くのだ。

私がそんなことを考へてゐる裡に、映畫は最後の字幕を大きく映し出した。私たちは、澤山の觀客にまちつて、グラウンドの表へ出て來た。

この場合、私達の感想を問はれたら「呆れたものだ」としか答へられなかつたらう。だが「呆れたものだ」とのみではすまされぬ滓が心の底に澱んでゐたのも事實である。「支那の田舎へ行つて、野天にスクリーンを張つて、農民を相手にして映寫してゐる時の方が、上海の豪華な映畫館で、映畫を見てゐる時より、遙かに楽しい氣がします。一つには、自分達も一種の戰闘員だといふ自負もあります。映畫といふものは、都會の豪華なサロンで見るものではなく、野外の粗末なスクリーンでも、民衆を心から楽しませるもの

でなければいけないといふ気がします。どうです。我々と一緒に出かけませんか。言葉では説明の出来ないものがありますよ」

「是非行つてみたいなあ。頼みますよ」

今日の映畫見物は、私には確かに無駄ではなかつた。租界に瀰漫するあくどいアメリカニズムとともに、支那人の中に浸透せる英語の普遍性を、われわれは見逃してはならぬ。

私は北支でも、中支でも、歐米人の作つた中學校、師範學校、大學等が散在してゐるのを見て來た。これ等の學校が、支那の教育組織の重要な骨格となつて、動いてゐるのである。

現代の支那に於ける指導者の中で、直接にしる、間接にしる、歐米流の教育組織の感化を受けないものは、殆んどないと言つてもいゝだらう。

上海にある各大學——震旦、聖約翰、明哲、滬江等の大學があるが、いづれも歐米人の作つた大學か、或は歐米流の教育組織をもつた大學なのである。

これらの學校で、若い支那の青年男女は、數十年に及んで、歐米流の教育を授けられて來たのである。そして、ここを卒業した學生達が、今日の支那の、中樞的地位に立つてゐるのだ。

しかも、アメリカなどは、この若い學生達を、アメリカ本國の大學にまで送つて勉強させてゐるが、その資金がどこから出てゐるかといふと、義和團事件の賠償金等なのである。

歐米人は、かゝる巧妙な手段によつて、支那の神經中樞に、彼等の勢力を扶植して行つたのである。従つて、今日の支那の近代的な教育組織といふものの大部分が、歐米流であると云へるのである。

支那全土に浸透してゐる歐米流の中學、師範學校、大學の教育を見て、事變前に日本系の學校が幾つあつたかと考へると、なにかしら愕然としたものを、われわれ感じさせられるのである。在支日本人のための學校はあるが、支那人を教育する日本系の學校は、歐米系の學校が支那全土に設立せられてゐるのに反して、實に寥々たるものであつて、私は寡聞にして支那人のための日本系の大學、中學等の教育施設を知らない。漢口で訪れた江漢

中學などが、唯一のものなのではなからうか。上海にある東亞同文書院大學は、私の知つてゐる範圍では、日本人學生を主としてゐるものである。

こんな状態なればこそ、歐米的な精神が、支那人の骨の髄にまで喰ひ込んで、彼等をして抗日的行動を起させたり、侮日的な態度を執らせるに至つたのではないだらうか。

皇軍の作戦の赫々たる勝利とともに、對支文化工作の問題が切實に考へられる時に、過去に於ける日本の對支工作を、こんな觀點からも充分に研討して見る必要があるやうに、私には思れるのだ。

歐米が對支文化工作の第一歩として、教育組織に着眼し、支那全土に學校を設立したことは、われわれとしても考へなければならぬ問題であらう。

皇軍の占領地では、民衆の宣撫工作として、移動演劇團や巡迴映寫班が活潑な活動をしてゐるが、これは勿論、作戦と並行して行はれる宣撫工作であつて、過渡的なものと解釋すべきであらう。

「巡迴映寫の時に、支那映畫なども持つて行くのですか」

「勿論、持つて出かけます。しかし、農村には近代式の支那映畫は駄目ですね。古い支那芝居を映畫化したものだとか、その喜びやうは大變なものです。文化映畫なんかでも、日本の軍艦や汽車だとか、近代的な小學校などといふものが、彼等の驚嘆の的となるらしいのです」

この話の中から察しられるやうに、われわれが歌舞伎に魅力を感じるやうに、支那の民衆の支那芝居に對する熱狂振りは、われわれの想像以上のものがあるのである。大陸を歩いてゐて、子供でも、女でも、苦力でも、何か歌を唄つてゐるとすると、その歌は必ず支那芝居の一節だと言つても過言ではなからう。

支那映畫でも、古い支那芝居の中から取材したものと、いつも壓倒的な人氣だといふのである。移動演劇團などでも、日本の新劇まがひの芝居よりも、支那芝居の一節を利用する方が、はるかに民衆の關心を牽きつけるらしい。

文學、美術、音樂等々と文化工作の面は、廣く大きく、多種多様である。だが、ほんたうに根を下ろした文化工作は、教育の問題なのではなからうか。日本系の學校をどしどし

開設してゆくことが、十年後に、二十年後に、大きな實を結ぶと考へられるのである。

英語が、今日の支那に瀰漫して、彼等の思想までもが歐米化してしまひ、日本に對して反抗的態度をとらしめるのは、日本に對する理解のないことが大きな一つの原因と考へられる。

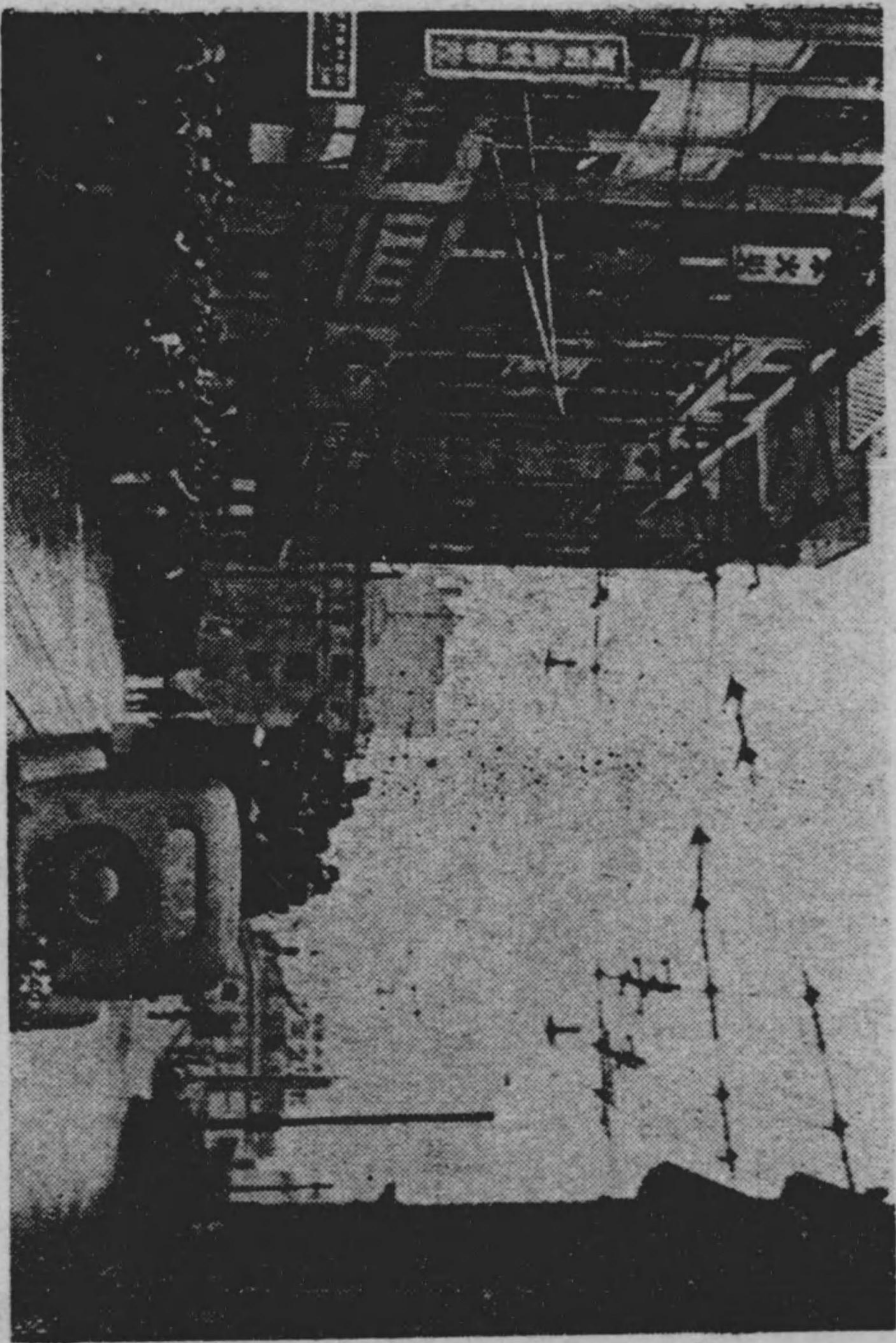
日本の軍艦や飛行機を見て、

「あれは日本で作つたのか」

と、不思議さうに質問する支那人が、今日でも、相當の知識階級に多いといふことは、雄辯に彼等の日本に對する認識の不足を物語つてゐると、私は考へるのである。

われわれは、儼然たる大東亞建設の事實を、彼等の眼前に突きつけて見せると同時に、支那の若い時代のために、先づ東亞的教育組織を確立する必要がある。——歐米的思想から解放し、彼等の從來の思想を根本から鍛え直すために。

——昭和十六年十二月七日。私は夜になるまでの時間を、宿舍の一室で、私のメモとして、ノートに、こんなことを書きしるしてゐた。



隊戦陸む進とへ界租を路川四北

十二月八日の上海

世紀の砲撃

曉闇の空を、斷雲が流れ、黃浦江上の船舶の帆檣に掲げられた赤や青の船燈が、暗い江上に明滅してゐる。

ブロードウェイ・マンションの、蘇州河に面した窓々も、深く帳を下ろし、巨大な影を闇の中に浮かしてゐる。黄包車の車夫が、蹴込みに凭れて、霜の降るのも知らぬげに睡りこけてゐた。

雨氣を含んだ斷雲が、上海の夜空を音もなく流れてゆくばかりで、江上は小波もなく静まり返つてゐる。モーター・ボートの波を切る音が、微かに傳はつて来る。

……パン、パン

乾いた様な拳銃の音が、江上に響くと、すーと夢のやうに眞紅の火花が、江上の闇空に上つて消えた。何だらうと思ふ一瞬もなく、

……グワーン！

物凄い火線と轟音とが、私の耳を裂き、腹の底をぐーんと揺がせて、江上に轟き渡つた。

一發、二發、三發……殷々たる砲聲は、大上海の巨大な建物に反響して凄まじい。續いて唸るやうな重機關銃の炸裂音！ 火花のやうな曳光弾！

（何が！ 何が起つたのか！）

私は眼前に炸裂する銃砲彈の凄まじい轟音に、茫然として眼を瞠はるばかりだつた。江岸から凄まじい勢ひで、奔流のやうに發射される銃砲火は、浦東側に碇泊してゐる船——英砲艦ベトレルへ集中されてゐるらしう。

（確かにベトレルだ！）

物凄い火焰とともに黒煙を噴いてゐるのは、昨日、この江岸から見た英砲艦ベトレルの姿なのである。黒煙は、濛々と曉闇の空に、火焰にあふられて、奇怪な影を投げかける。

火焰は江上を眞紅に染めて、艦影をはつきりと浮び上らせてゐる。胸を衝く機關銃の連

射音が、江上を斜めに縫つて、螢火のやうに飛散る。

(米砲艦ウエークがゐる筈だ！)

私の頭はやうやく思考を取り戻したらしい。

ペトレルの猛烈な火焰に照らされて、同じく黄浦江上に浮んでゐるウエークの眞白な船體が、くつきりと焼けつくやうに見える。

(あッ！ 白旗！)

ウエークの橋頭には、一流の白旗が、火勢にあふられるやうに靡いてゐる。今まで熾烈だつた銃聲、砲音は、ぱつたりと絶えて、死のやうな静寂さが、一瞬、江上を鎖してゐるが、私の耳底には、依然としてまだ轟音が斷續的に響き渡つてゐる。

(何が起つたのか？)

燃へ上つたペトレルは、斷末魔の黒褐色の煙を一筋、江上に漾はして、沈んでしまつたらしい。ウエークの艦影も、もう定かには見分けられない。しかし、曉近い空には、ほのかな曙光が射して來た。

——轟音が夜空を慄はせる。

一機、二機——青い翼燈が流星のやうに、斷雲を縫つて旋回してゐる。

又、ひとしきり機銃が、鋭い連射音を響かせる。

私は又しても、自問自答した。

(何事が起つたのだらう)——だが、解答は出て來ない。英砲艦は撃沈され、米砲艦は白旗を掲げてゐる——これは何を物語るのか。

飛行機から、さつと黒い塊りが投げられ、見る見るパツと散つて、上海の街の上へ散つて行く。明けやらぬ夜空にも、傳單らしいと察せられる。

次第に人影が浮び上り、顔の表情が讀まれる。夜が明けて來たのだ。銃剣を構へた陸戦隊の勇士達の姿が、やうやく明瞭になる。緊張した表情の中にも、明るい喜色が、勇士達の顔の色にうかゞへる。

怪訝な顔をして、茫然と立つてゐる私の顔は、どんな表情をしてゐたであらうか。ふと仰ぐと、虹口側のプロドウエイ・マンシヨンの窓々を始め、蘇州河に面した建物の窓々に

は、煌々たる電燈が點けられて、どの窓にも、ちツと黄浦江の邊りを凝視してゐるらしい人影で溢れてゐた。

飛行機は、まだ共同租界の上を、かなりの低空で旋回してゐる。

(再び上海が重慶軍に包圍されたのか。莫迦、莫迦しい。だが、英艦、米艦はどうしたといふのだ)

私の思考は、又しても、どうどう巡りを始める。

ダダダ……。ダダダ……。機関銃の連射音が、最後の止めを刺すやうに、斷續して、再び響き渡つたと思ふと、江上は、音もなく静まり返つた。

——さうだ。報道部へ行つてみよう。

私はさう考へると、ふツーと思はず息をついた。

昂奮の醒めやらぬ私は、足早やに日本電信局の横を抜けて、報道部へと急いでゐた。

——正直な話が、昨夜、上海の友人達と共同租界を一巡して、虹口側へ歸つてから、深夜まで語り明かしてゐて、宿へ歸らうと一人で歩いてゐる私の眼に、陸戦隊の勇士達が、

舗道を共同租界の方へと進んで行く軍靴の音に氣付いて、暫く忙然と立ち止まつてゐたのだつたが、何故ともなく深夜の警備にしては變んだと思つたばかりに、物凄い砲撃を目撃することになつたのである。

虹口側の街は、あの物凄い砲撃を聞いた街とも思はれぬほど、人影もなく静かである。

黄包車曳が、ぼかんとした顔で立つてゐる。報道部への途中、ふと思ひ出して、同盟通信社の階段を駆け上つたが、人影もない。私は再び階段を駆け下りて、北四川路を走つてゐた。軍隊の乗用車が、租界の方へ物凄い勢ひで駛り去つた。

さツ——と霧のやうな雨が降り出した。私は走りながら、路の向側の、店頭の飾窓に、人だかりのしてゐるのを見つけた。

驟雨に濡れた舗道を横切つて、私はその人達の間から覗き込んだ。

(八日午前六時大本營發表)帝國陸海軍は本日未明西太平洋において米英と戦闘状態に入
れり。

筆蹟は昂奮を物語るかのやうに、勢ひよく、肉太に墨跡をにじませて書いてあるのが、私の眼に喰ひ入つた。

——これだ！

私は、今曉の眼前の砲撃が、何んであつたかゞ分つて、一切の混沌たる思考が、すーつと開けて行くやうに、何か叫び出したい衝動を感じた。

——畜生ッ！ これだ！ これだ！

一瞬、譯の分らない温い涙のやうなものが頬を傳ひ、ほのぼのとした明るい氣持が、湯のやうに湧いてくる。この發表に讀み耽けつてゐる人達の顔には、ぐつと唇を噛みしめた緊張感とともに、どこやら暗雲の晴れたやうな明るさが見られる。

驟雨は晴れ間を見せては、街路を清めるやうに、又してもサツと、霧のやうな細い雨を降らして行く。なにか心温い雨である。

雨の中を、私は又駈け出してゐた。

——すると、軍使の頭の上を、第一發がすつ飛んだんだね。

——さうなんだ。赤い信號弾がすーと上つたと思ふと途端だよ。

報道部の寫眞班の一人が、いささか頬を紅潮させ、語調に、今曉の凄まじい砲撃の昂奮を見せて語つてゐる。

南京の總軍報道部の高山中尉の姿が見える。

「よオ、今朝の砲撃を見たかね。僕達はたつた今着いたばかりだ。得平中佐殿も来てゐられるよ。だが、君はいゝ時に上海へ来てゐたもんだよ」

さう言ふと、高山中尉は忙しさに階段を駆け上つて行つた。

窓から見える報道部の門内には、數臺の自動車がずらりと並んで、細雨にたゞかれてゐる。陽光が、時折りちらりと射してくる。緊迫した空氣が、報道部の建物をつゞんで、人々の往來も速しい。

——集合！

私はガランとした一室で、辻久一君を擱へて情報を聞いてゐたが、命令の聲に、辻君と一緒に起ち上つた。集合室には、報道部の全員が整然と並んでゐる。私もその末尾に附して並んだ。

——氣をつけッ！

號令一下、全員はさつと姿整を正す。秋山報道部長の毅然たる聲が、私の耳朵に響いてくる。

——邦家の大事は、既に決せられたのであります。今晚六時、大本營陸海軍部は、帝國が米英兩國と西太平洋に於て戦闘状態に入りたることを發表し、諸子の聞かれた殷々たる上海の砲聲は、米國の砲艦一を降伏せしめ、英國の砲艦一を黃浦江の藻屑と化したものであります。今や上海は第一線となりました。軍は、本午前十一時を期して、共國租界に進駐を行ひます。こゝに命令を傳達します。命令——。

集合室の天窓からは、明けはなれた朝の空が、曇つてはゐるが、人々の顔を明るく浮び出さしてゐる。

租界進駐！ 租界進駐！

今日こそは、あの敵性租界へ進駐するのだ。湧きたつやうな感激が、電光の如く心を慄はせる。

今日の如き偉大な朝が、日本の歴史にあつたらうか。

日本は決然と起つて、米・英と乾坤一擲の戦争を開始したのだ。かゝる偉大なる歴史の轉換を要求するよき日に、私はよくぞ上海に居たものだ。

上海——米・英が東亞侵略の根據地とし、重慶が抗日の最前衛據點とした上海共同租界へ、堂々の進駐をするといふのである。彼等の根據地を一舉に殲滅する絶好の日なのだ。あの敵性を、租界から完全に掃してしまふのである。

……私の眼には、九江の近くの江岸にあつた米國旗の描かれた數個のタンクが、漢口の碼頭にあつた英・米の國旗を船腹に描いた商船の姿が、大陸の各地の、十字架の尖頭を見せた教會堂の建物が、判つきり焼けつくやうに浮んで來た。

——陸軍報道部は、租界内の新聞社、放送局などの文化的機關を接收する。

——勿論、平和的接收を行ふべきだが、抵抗するものがあれば、斷乎たる處置をとる。秋山報道部長の命令が、力強く低い天井の部屋に、一句一句響く。報道部員の部署が、それぞれ傳達される。

——敬禮！

私は我れに返つて腕時計をのぞく。十一時までには、未だ三時間餘りある。

（さうだ。是非とも、この租界進駐に参加させて貰ふのだ。こんな機会は、二度とあるものではない）

私は、直ぐに得平中佐を摑へた。

——お願ひです。進駐に参加させて下さう。

——うん。だが、我々が接收に行くのは、敵性放送局だ。危いかも知れんよ。

——いや、構ひません。

得平中佐は笑ひながら、

——ぢや、報道部長に相談して上げよう。

私は得平中佐の後に随つて、報道部長室への階段を上つた。

租界進駐を目前にして、部長室は多忙を極めてゐる。名刺を差出し、得平中佐を通じて進駐参加を懇願する。

——よし、では階下で待つてる！

階下への階段を下りながら、私は心の裡で（萬歳！）を叫んでゐた。

「どうした！」

「よオ！」

南京では、背廣服姿ばかり見てゐた同盟の長谷川仁君が、従軍服も勇ましく聲をかける。

「進駐！ 進駐！」

「参加するのか。よかつたな。だが、危いぞ」

危いも、危くないも、私には問題ではなかつた。北支、中支と戦闘を追ひかけて、戦闘に巡り會はずに、このまゝ内地へ歸るのかと諦めてゐた矢先である。兵隊でない限り、こんな幸福に二度と逢へるものではない。

「嚇かすなよ」

私は冗談を言ひながら、報道部を飛び出すと、黄包車を拾つて、空腹を充すべく宿へ歸つた。

「腹が減つては戦が出来ぬ。腹が減つては戦が出来ぬ」

私は譯の分らんことを呟いてゐた。どうも昂奮してゐるらしい。だが、これは昂奮してもよさうである。いや、昂奮するのが當然であらう。私は宿で朝食をすませてから、荷物の整理をして、部屋の一隅にきちんと置くと、又街路へ飛び出した。進駐までには、未だ充分に時間がある。

私はもう一度、今曉の砲撃の跡を、よく見て置きたくなつて、蘇州河畔へと、踵をめぐらした。萬國橋も、四川路橋も、白渡橋も、陸戦隊と日本憲兵隊とが出動して、群がる中國人を完全に制し、交通遮断をしてゐる。

憲兵隊や、陸戦隊員の表情にも、どこか晴々とした明るさが見える。

黄浦江岸の日本領事館近くの岸壁へ出て見ると、黄濁した江上には、朝霧がうすく罩め

てゐて、あの猛烈な砲撃の名残りなどはどこにもなく、河は靜かに流れてゐる。たゞ、昨日と違つてゐるのは、常には右往左往してゐる夥しい戎克が、風に吹かれた芥のやうに、江岸に蝟集してゐて、旭日旗を船尾に翻へした海軍のボートが、唸るやうな警笛の音も明るく、濁流を蹴つてゐることだつた。いや、そればかりではない。ウエークの艦橋高く、白旗は既に引き下ろされて、海軍旗が燦として光つてゐる。まだある。昨日まで英國旗を高々と掲げて、江上を我物顔に航行してゐたヂャーデン・マヂソンの汽船の帆檣に、一隻残らず、日本の旗の翻へつてゐるのも、確かに昨日に變る風景であらう。パブリック・ガーデンの黄色く色づいた樹々が、江上に影を落してゐるのまでが、何か眼にしみて見られるのである。

浦東の工場地帯の上空には、諦め切れぬやうな一團の灰色の雲が、朝陽の逞しい光りを受けて、眞紅色から橙色へと染め上げられながら、靜かに流れてゐて、その奥に緑青色の澄んだ空をのぞかせてゐた。

日本時間と上海時間とは、一時間の差があるのだ。進駐開始の十一時は、上海時間で

は十時なのである。私の時計は、日本時間の十時を示してゐる。そろそろ報道部へ行かうと、北四川路の通りへ向つた。

街路は、日本人や支那人で一杯に溢れ、街頭に貼られた各新聞社の速報の號外の前は、黒山のやうな人だかりである。支那文の號外も散見し、支那人の異常に緊張した顔が、速報を凝視してゐる。號外と並んで、大日本陸海軍の支那文の布告が、飾窓や練瓦塀に貼られてゐた。布告には、

——日本軍は今朝より東亞の秩序を脅かす米英勢力と西南太平洋に於て、戦争状態を展開した。租界も、今日限り日本軍の管理下に置かれる。日本の望むところは、要するに租界内の中國民衆の安居樂業であり、その生活は充分に保護するものである。中國人は安んじて、その業につけ。但し、日本軍の命に反し、また敵性行爲をなし、武器などを隠蔽する者は、軍律の定むるところに照して、嚴重に處罰するものである。

といふ意味の嚴然たる内容のものでつた。

今こそ、東亞の天地から、米英の勢力を完全に、根こそぎ驅逐して、東亞をして眞の東

亞たらしめるのだ。

(これだ。これではなくては……)

私は自分でもおかしい程、この布告を拾ひ読みしながら、布告の一字一字に肯づいてゐた。

人波を縫ふやうに、激しい警笛の音をさせて、軍用自動車が疾風のやうに、雨で洗はれた街路を、箒のやうに走つてゐる。太陽は雲を破つて、すがすがしい光りを投げ始めた。

(あッ、虹だ)

私の側を擦れ違はうとした人が、ふと空を見上げて立ち止まると、呟くやうに叫んだ。空を見ると、大きな幅をもつた鮮やかな虹が、敵租界の上に、見事な圓を描いて懸つてゐる。——皇軍の租界進駐を祝福する歓迎門でもあるかのやうに……。

報道部の門内は、出動を前にしてぴーんと緊張してゐるが、どこかに一脈の賑やかさが漲つてゐる。

「おい、君は武器を持つてゐるのか」

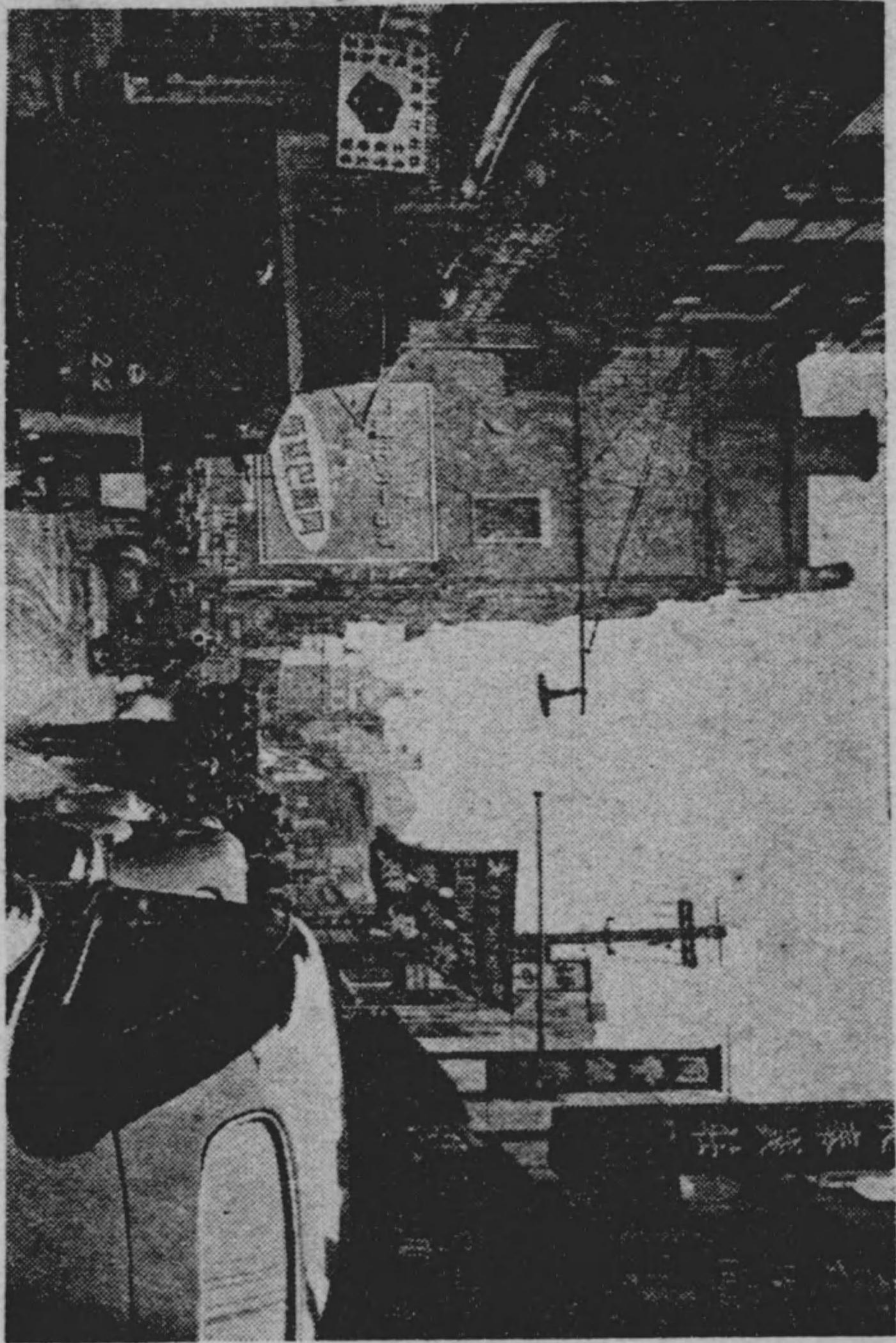
長谷川君が、腰の拳銃のサツタを叩いて見せた。

「武器……いや、持っていないよ。そんなもの必要なのかい」
「暢気な奴だ。もうないかも知れんぞ」

私の頭は、租界進駐といふことばかりで一杯になつてゐて、危険を伴ふかも知れない、敵性文化機關の接收といふことを、すっかり忘却してゐたのだ。

「仕方がない。何か武器らしきものでも持つて行くか」

結局、私は頑丈な鐵製の檢廻しを探し出して、ジャンパーのポケットに忍ばせた。我ながら珍妙な武器であるとは思つたが、鐵の肌ざわりは、ひんやりと掌に冷たく、氣強さを與へてくれるのである。



共租界四路を進駐する皇軍

租界進駐

——集合！

十時三十分、租界進駐に出動する報道部の全員は、報道部の門内に整列する。霧雨が、再びさーつと降つたかと思ふと、燦々たる陽が輝き始めた。

報道部長の訓辭を受けて一班、二班と別れて、自動車に乗り込む。

「おい、確りやれよ」

高山中尉が、緊張した瞳を、眼鏡の奥に光らせて、私の肩を叩く。

私は得平中佐の指揮される第一班の自動車の操縦席に、カメラの堀野正雄君と並んで腰を下ろした。自動車は豪華な流線型の乗用車だ。

いよいよ進駐である。長谷川君は何班に属するのか、まだ門前に立つて、我々に向つて手を振つてゐる。自動車は雨に濡れた舗道を、一直線に北四川路に沿つて駛つて行く。我

我の前には、陸戦隊を萬載したトラックが幾臺も續いてゐる。後部にも陸戦隊のトラックが續いてゐる。

兩側の歩道は、日本人や支那人で一杯に溢れ、ホテルの窓から大きな日の丸の旗が、萬歳！ 萬歳！ の聲とともに振られてゐる。歩道の日本人は、兩手を高く上げて、萬歳を絶叫してゐる。

トラックの上の陸戦隊の勇士達も、これに應へて高らかに手を振つてゐる。

「……いなア」

誰からともなく、そんな聲がする。この光景を、私達は他に形容する言葉を知らない。單純なこの言葉に、私達の感情が充ち溢れてゐるのだ。

私達の自動車も、堂々たる租界進駐の行進の隊列の中にあるのだ。鮮やかな日章旗を、車體の先頭に翻へし、報道部の印をつけた自動車にも、萬歳の聲が浴びせかけられる。私の心は、この租界進駐に参加しつゝある感激に慄へ、ぐつと胸に迫るものを感じる。私は腕に巻いた報道部の腕章を、しつかり握んでゐた。

四川路橋を渡ると、道の兩側は支那人で一杯で、既に橋近くの敵性建築物には、海軍旗が翻へり、陸戦隊の装甲車が、嚴然たる偉容を見せて進んでゐる。この周圍一帶は海軍側の接收地帯らしい。陸續とつゞくトラックからは、銃剣を閃めかして、黒の戦闘帽に水兵服の兵士達が、バラバラと飛び降りると、さつと配置について行く。

支那人達が緊張した顔で、刻々と變化して行く租界内の事態に眼を瞠つて、茫然と立ち竦んでゐる。日頃の喧燥を忘れたかのやうに……。

我々の自動車は、陸戦隊のトラックの横を擦り抜けて、租界第一の繁華街——南京路を目指す敵性放送局へと突進する。繁華街の朝は遅いらしく、人通りもまだ多くはない。今だに、今朝の銃砲聲が何を物語るかを理解してゐないらしい支那人達が、我々の自動車を不思議な顔をして見送つてゐる。黄包車に乗つた支那人が、悠々たる様子で、紫煙を煙らせて擦れ違つて行く。——昨夜の歡樂に疲れて、目の醒めやらぬ街の姿は、白々しくうそ寒い。

自動車は、南京路を突きぬけて、靜安寺路の十四階のパーク・ホテルが、覗き込むやうにしてゐる競馬場を、馬霍路へ曲がらうとする角で、びたりと停止した。

ここには、轟々たるキヤタピラの音を響かせて、陸軍の戦車隊が進駐してゐて、先頭は既に競馬場に沿つた道路に、逞しい姿を見せてゐた。滬西方面から進駐して来たのである。この一帯が陸軍側の警備地区となるのであらう。

競馬場の周囲は、支那人が遠巻きにして、日本軍の偉容に呆然たる様子である。我々は馬霍路を眞すぐに、太沽路の角へ進んだ。

「まだ十一時まで十分ある。みんなの時計を合はして置かう」

街角からは、無数のアンテナを屋上に張つた放送局の建物が、眼前に見えてゐる。我々は得平班長の言葉に、各自の時計の針を合はした。携行した武器を調べてゐる。私はポケットの捻廻しを、ぐつと握りしめた。

「よし、十一時だ」

我々が街角を離れて、放送局の方へ、舗道を横切らうとした瞬間、後方から来た軍用トラックが、びたりと放送局の前で止まると、三四人の兵士がバラバラと飛び降りた。そして、指揮官の若い將校のキビキビした命令で、直ちに配置につかうとしてゐる。

得平班長を先頭に、我々も駆け出した。得平班長が指揮官と、二言三言話をしたと思ふと、さつと擧手の禮をして、若い將校は、ひらりとトラックに身を翻へすやうにして上ると、警備の兵隊を残して、トラックの兵隊と共に、驀地にいづこへか駛り去つて行つた。

(さア)

得平中佐は、無言のまま、放送局の扉の方へ進んで、入口の呼鈴を押した。

一瞬、二瞬……さつと流石に緊張感が、私の体内を流れる。

扉が細目に開けられて、白い顔がのぞいた。間髪を入れずに、我々はさつと放送局の内
部へ乗り込む。放送局の表も裏も、既に嚴重に固められてゐる。

だが、このアメリカ系の放送局——華美無線電機公司(XMHA)には、たゞ二人の白系ロシアの女と、一人の支那人の雇人がゐただけだつた。この放送局の局長のアメリカ人は、まだ姿を見せてゐないのだ。

上海の外人達は、まだ徹宵の歡樂の疲れで、睡り呆けてゐる時刻なのかもしれない。それとも、今朝の砲撃に狼狽して、上海の街のどこかに、身を潜めてゐるのでもあらうか。

だが、もう袋の中の鼠と同じことである。

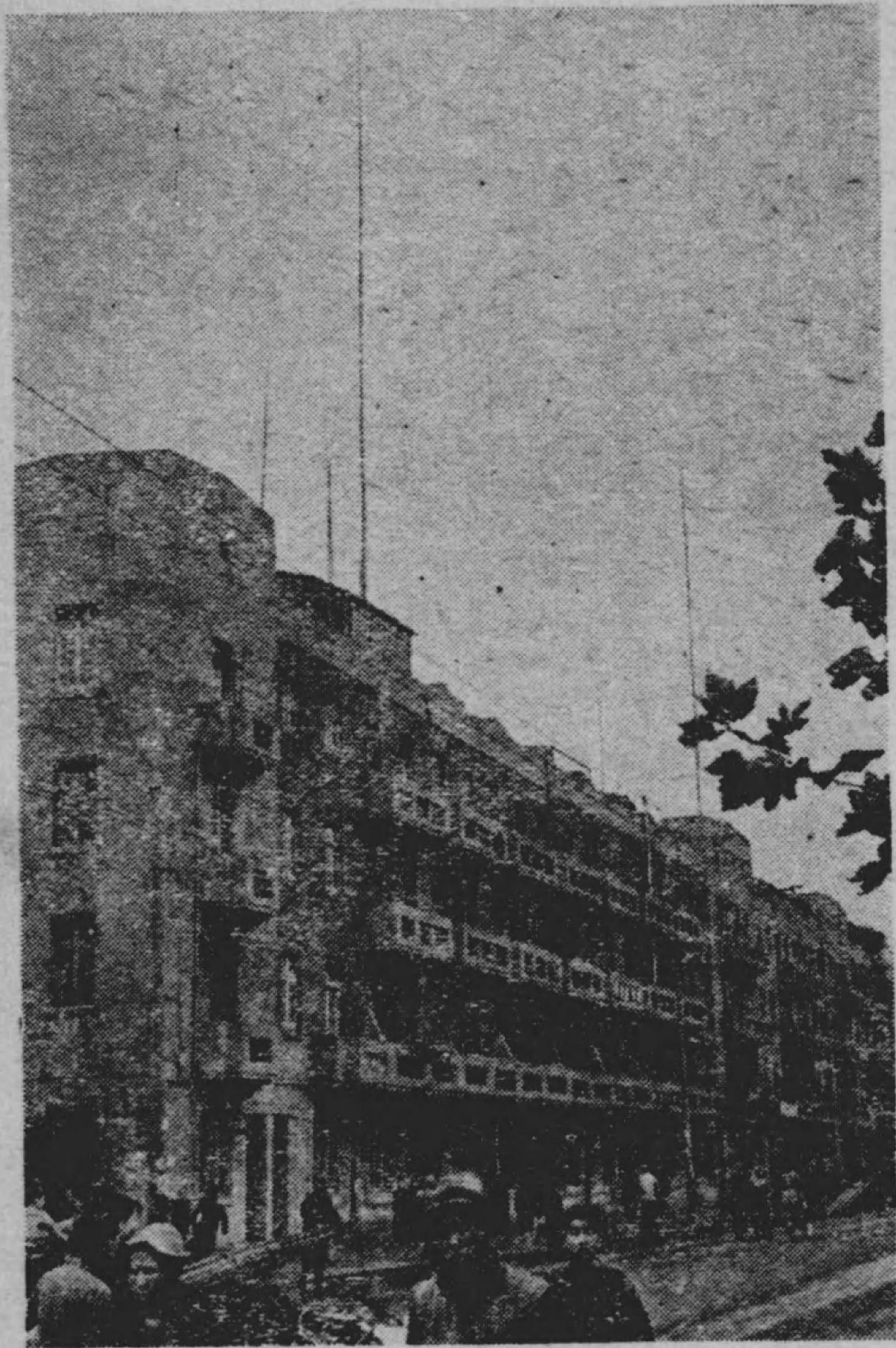
白系ロシアの女達を相手に、接收事務はキビキビと片付けられ、一切の器物には、日本軍接收の封印が貼られる。女達の訊問も、穏やかに進められてゐる。彼女達は別に不安さうな面持ちもなく、諦めに似たやうな表現を見せてゐるだけだ。

「この女の御亭主といふのは、マリンださうだよ」

得平中佐の穏やかな顔に微笑が浮ぶ。私も側で聞くともなく聞いてゐた。流暢な英語なので、断片的にしか分らないが、亭主のアメリカ陸戦隊の兵隊は、アメリカか、マニラ邊へ連れて行かれてしまつたらしい。

私は上海の碼頭でポロポロと涙を流して、アメリカの兵隊達と別れ惜しんでゐる女達――所謂チャイニーズ・ワイフ達の顔を、大寫しに撮つた寫眞を見たことがある。この白系ロシアの女達も、その仲間の一人だつたのだらう。

張りつめた緊張が弛んで、ポケットの捻廻しにも用がなくなつたので、私の心にも餘裕が出て來た。



街角より敵性放送局X.A.R.M.の全景を望む

警備の兵士の一人が、

「屋上に旗を立てたいのでありますが、よろしいでありますか」
と、得平中佐の許可を求めに來た。

「よからう」

私達は兵士の後から、屋上に出る階段を探した。

馬霍路の角から見た放送局は、大きな建物に見えたが、この建物は、三階建のアパートになつてゐて、放送局はアパートの階下の一隅を占めてゐるに過ぎなかつた。だが、この放送局は、昨日までは重慶側と策謀して、反日宣傳に狂奔してゐたのである。放送局は小さくても、機械類は優秀らしい。

「どうです。機械類は？」

「相當なものですよ」

薄暗い機械室へ潜り込んで調べてゐる技術者の方に訊くと、さうした返事だつたのを見ても分かるのである。

私達はぐるぐると階段を駆け上り、支那人の住んでゐる部屋を通り抜けて、挨拶をしなから屋上へ出た。竹竿の古いのを探し出して、早速屋上高く日章旗をかゝげたのである。

「紀念に寫眞を撮りませう」

堀野君のカメラの前に、日章旗を仰いで立つた。

階下へ降りながら、私は何故ともなく兵隊に訊いた。

「君の部隊はなんといふのですか」

「〇〇部隊松本隊です」

「えッ、では〇〇に居たことがありますか」

「はッ、〇〇に居りました」

「ぢや、隊長は松本三郎と言はれませんか」

「さうであります」

偶然——正しく偶然なのである。内地を出發する時に、私は牧野英二君——新太陽の編輯長で、蘆山の金輪峰の激戦に有名を轟かし、南昌攻略戦では一番乗りの偉勳を樹てた歸

還中尉——から、中支へ行つたら訪ねるやうにと、松本隊長への紹介状を持つてゐたのだ。

「ぢや、先刻の將校の方が隊長ですか」

「さうであります」

私はその兵士に名刺を托して、後日を期して訪れる旨を認めたのだつた。

階下の放送局では、張り合ひ抜けて、いささか手持ち無沙汰になつた一同は、ピアノなどを弾いてゐる。

「楽しいき接收ですね」

明るい笑聲が、放送室内に朗らかに響く。

「さア、これでよし、我々は引きあげることにしよう」

得平中佐の命令の下に、入口の扉は嚴重に封印され、英支兩文で書かれた（大日本陸軍占領——此の建物を破壊若くは物品を移動する者は嚴罰に處す可し）といふ怖告が貼りつけられた。この附近は静かで、人通りも餘りなく、道路の向ふに二三人の支那人が、屋上の日章旗を仰いでゐるのが見られるくらゐだつた。二人の白系ロシアの女も、支那人の傭

人も自由に解放して歸らせしめた。

「グツ・バイ」

彼女達は、別に憂鬱さうな様子もなく、別れの言葉を残して、何處へか歸つて行つた。「さア、街の様子を見ながら歸るか」

自動車は、米・英租界と佛蘭西租界を劃する愛多亞路——アベニュー・エドワード七世路を一直線に、黄浦江の江岸へ向つて滑つて行く。佛蘭西租界への入口になる路々には、鐵條網やバリケードが築かれてゐて、佛蘭西の警備兵が、派手な軍服を着て、碧い眼を光らしながら、支那の民衆の前に立つてゐる。

出入を遮斷された支那人達は、鐵條網やバリケードを挟んで、奔めいてゐる。

この佛蘭西兵にしても、支那人にしても、日本が決然と起つて、米・英を相手に戦端を開いたことに、どんな感情を抱いてゐるだらうか。——私はふツと、そんなことを考へた。

自動車は江岸に沿つて進んで行く。黄浦江を壓して建ち並んでゐる巨大な建物——四角

な形の上海香港銀行や、白い大きなドームのやうな江海關などの建物にも、今は海軍旗が翻へつてゐて、江岸は日頃の喧燥さを忘れたやうに静かで、常には江岸を埋めてゐる苦力の姿もなく、海軍の將兵の姿の外には、人通りもない。

「あッ、イタリーの旗！」

自動車の窓をかすめて、ある建物の入口に、小さいイタリーの旗がぶら下げてあるのが見られた。その旗が、餘りにも小さかつたのが、私達の微笑をさそつた。

江岸の世界大戦平和記念塔の前には、海軍の警備兵と陸軍の警備兵が、銃を構へて立つてゐる。黄濁した江上には、日本の軍艦の灰色の姿が周圍を壓し、捕獲された英米系の汽船やウエーク號が、冬風に曝らされて浮んでゐた。

英艦ペトレルを、濁流の底に呑み込んだあたりには、水鳥が悠々と輪を描いてゐる。

英國總領事館の金色燦然たる紋章をつけた鐵柵の門前には、海軍部隊の精銳が、嚴然として警備してゐる。葛の絡まつた赤練瓦の建物が、芝生の向ふに空しい姿を見せて、岑閑と音もない。

この建物の奥で、昨日まで如何なる謀議がつゞけられてゐたことか——敵が東亞侵略の根據地とし、又重慶が抗日の前衛據點とした上海に在つて、悪辣な策動をつゞけてゐたのも、この建物だつたのだ。だが、それもこれも、今は儂い野望に過ぎなくなつたのだ。

自動車は英國總領事館の扉にそひ、蘇州河を渡つて北四川路の通りへ出た。日本人商店の飾窓といふ飾窓には、ベタベタと新聞社の速報が貼られて、人々が黒山のやうに集つてゐる。ラヂオが大きな聲を響かせてゐるのが、自動車の中まで響いてくる。

報道部の前庭で自動車を降りて、私は得平中佐に禮を述べると、再び街頭へ飛び出した。一刻も早く飾窓に貼られた速報が讀みたかつたのである。

飾窓に貼られた速報の文字は、勢ひ餘つて、跳ねるやうな筆勢を見せてゐる。

——ハワイ、眞珠灣、マレー、マニラ、ウエーク、グアム……西太平洋に於て戦争状態に入つたとは知つてゐながら、これは餘りにも、素晴らしい文字である。

私が上海で、英艦撃沈を目撃してゐた瞬間に、我が海軍航空部隊は、果敢にもハワイの眞珠灣に、猛烈な爆撃を喰はしてゐたのだ。いや、西南太平洋一帯に米・英撃滅の必中彈

が、時刻を一つにして火蓋を切つてゐたのだ。

陸軍部隊は潮の殺到するやうに、マレー半島への敵前上陸を敢行してゐたのだ。フィリッピンにも、香港にも……。私は速報の一字一句を喰ひ入るやうに、貪り讀んだ。

店内のラヂオが、壯重な響きに變つた。私は店頭へ近づいた。

それは、長くも對米・英宣戰布告の大詔が捧讀されてゐたのだ。私は、いや、周囲の人は、さつと姿整を正し、頭を下げて懸命に耳を澄ました。

御大詔捧讀の聲が、心なしか震へて聞える。いや、私の心が感激に慄へてゐるのであらう。涙が頬を傳ふのを、私はそのままにして聞き入つた。その放送が終るか終らぬかに、肅然として佇んでゐた群衆の一人が叫んだ。

——大日本帝國萬歲！

聲は感激に打ちふるへてゐる。その聲に和して、男も、女も、子供までが、感激に瞳をうるませて、心の底から力一杯に、海を越へて、内地までも響けと、双手を上げて叫んだのだつた。



上海の繁華大界世近附警備する皇軍憲兵

私も亦、その群衆の一人だった。

街を行く日本人の顔は、緊張に輝いて美しい。私の足は、又しても蘇州河畔の方へ向いてゐた。河向ふの江岸あたりは、まだひつそりと静まり返つてゐる。空を仰ぐと、何時の間にも上げられたのか、競馬場附近と覺しきあたりの、薄曇りした空にアドバルーンが上げられてゐて、

——日軍保確租界治安

の文字が、上海の街を見下ろしてゐた。そのアドバルーンを見ながら、私はなんの聯絡もなく、南京にゐる草野心平氏の言葉を想ひ出してゐた。

(日本はいいなア、日本はいいなア)

詩人らしい情熱をこめて、讃仰するやうな調子の、草野氏の言葉が、沁々とした實感となつて、私の胸に響いてくるのだ。

(日本はいいなア、いいなア、日本は)

私は低く聲に出して、繰り返し、繰り返し呟きながら、いつか歩き出してゐた。

變貌する租界

進駐の午後（一日目）

虹口から共同租界へ、共同租界から虹口へと往來する群衆で、四川路橋は滾れるほどの雑踏を見せてゐる。橋の中央部は、車道になつてゐて、人々は兩側の歩道を一列になつて渡つて行くのだが、朝から晩まで織るやうな人の流れである。

今日も、日本軍の堂々たる租界進駐が行はれた午後なのだが、ここばかりは日頃の雑踏と變りはない。いや、昨日にもまして、物凄い雑踏なのである。

私は進駐後の共同租界が見たくなつたので、群衆に混じつて四川路橋を渡つた。

橋を渡ると、昨日まで星條旗のぶら下がつてゐたアメリカン・ネエビイ・クラブの豪華な建物の前に、迷彩をした日本海軍の戦車が停つてゐて、戦闘帽に鐵兜を背に負つた陸戦隊の勇士達が、盛んに出入してゐる姿が見られ、大きな海軍旗が（〇〇ぶたいほんぶ）と書かれた玄關に、眞紅の色も鮮やかに立てられてゐた。

租界の雑踏は物凄く、肩々相摩すどころではなく、人の流れに押されるしかないので、遅々として進まない。その雑踏の中を掻き分けるやうにして、無軌道電車が駛り、二階付乗合自動車も、巨體を軌しませて疾走するかと思へば、黄包車が小川の目高のやうに、人波を縫つて、宙を飛んで走る。

昨日にもました雑踏である。それに今日は、街の要所、要所に貼られた工部局の對日協同聲明の、華文と英文の布告を讀む群衆や、日本軍の布告に喰ひ入る様に嚙りついてゐる群衆で、人の流れは喰ひ止められてゐる。

英文の布告の前には、米英人らしい姿が、いつまでも立ち停つて、動かうともしないのが見られた。

人の流れの中を、新聞賣子が裸足で、何か大聲に叫びながら、新聞を賣りつけてゐる。賣子の抱へてゐる新聞を見たら、昨日まで租界内では絶対に見られなかつた「新申報」だつた。

「新申報」は汪精衛系だとか、日本系だとか言つて、租界内では滅多に見られない新聞だ

つたのだ。一發の銃聲を響かせることもなく、疾風迅雷的に、平和的無血占領をした皇軍の周到な機敏さが、この租界に、昨日に變らぬ雑踏を見せてゐるのであらう。

中國銀行にも「日本軍占領」の布告が貼つてあつて、警備の兵士が立つてゐる。街の所

所で、敵性建築物の接收に歩いてゐる部隊の行進するのが見られた。

トラックに食料や毛布を満載した陸戦隊が、接收した「〇〇ぶたい」の建物の中へ、それらの荷物を運び入れてゐるのが見られる。

276

租界内の商店は、まだ店の鎧屏を鎖してゐるのが多かつたが、それでも店を開けてゐるのも、ぼつぼつあるにはあつた。だが、錢莊といふ錢莊は、嚴重に扉を下ろしてゐて、一軒も店を開いてはゐない。

——失敗つた。これでは黄包車にも乗れなければ、飯も食へない。

私はこれには、全く當惑してしまつた。何しろ、私の懐中には、日本の軍票があるだけで、一文の法幣も持つてゐなかつたからである。

——さうだ、中華映畫へ行つてみよう。

南京路を横切つて、四馬路の四つ角にあるハミルトン・ハウスへ足を向けた。中華映畫の事務所のあるハミルトン・ハウスも、それに相對するデベロツプメント・ハウス、メトロポール・ホテルなどは、何れも十數階のビルで、こゝだけは太陽の温い光線から遠く、下から仰ぐと谷底にゐるやうな感じがする。

もう一つの角には、工部局の薄暗い陰氣な建物が、深い蔭を落してゐる。これらの巨人の群り立つ様な建物は、いづれも、英系ユダヤ人のサツスーン財閥のビルディングなのだが、もう既に海軍側によつて接收されてゐた。ビルの玄關脇には、憲兵隊が出張して、出入の人々を監視してゐる。

私はつかつかと、三臺並んだエレベーターの、降りて來たばかりの、中央の一臺に乗つた。

——あッ、これは……。と思つて、運轉手の支那人の顔を見たが、彼は素知らね顔をしておる。

いや、これでいゝのだ。何を下らない遠慮をする必要がある。

私が、何故こんな事を思つたかは、説明しなければ分かつて頂けないだらう。

私は一昨日も、昨日も、このビルを訪れて、最初の日に、うっかり中央のエレベーターに乗らうとして、支那人の運轉手から劍突くを喰つて憤慨したのである。なぜならば、この中央のエレベーターは、外人専用のエレベーターで、東洋人は左右の二臺に限つて乗ることになつてゐるのださうである。

それが今日は、中央のエレベーターに乗つても、運轉手は文句も言はずに、素知らぬ風を装つてゐるし、同乗の外人達も、碧眼をあらぬ方角へ向けてゐるのである。

四階の中華映畫の事務所は、出社してゐる社員の數も餘りなく、ガランとしてゐて、訪ねる多田裕計君の顔も見えない。

誰か窓から外を見てゐる肩巾の廣い男の後姿を圍んで、二三人の人が見えるだけである。

「多田君は來てゐませんか」

私の聲に振り返つた窓側の人達の中の一人が、

「よオ、どうしたさ」

と、明るい太い聲で、私に呼びかけると、ツカツカと近づいて來た。

「よオ、虎ちゃんか」

私達は手を握つた。

「多田君は近く來るよ。まア、掛けるよ」

國木田虎雄——この、文豪國木田獨歩の嗣子——と、相逢はざること幾年だつたらう。外人とも見紛ふ堂々たる體格で、頭髮には少しばかり銀髪を加へてはゐるが、人懐こい微笑を頬のあたりに見せてゐる面影は、昔と少しも違つてゐない。

「白くなつたな」

「ははは……もう幾年になるかな。だが、氣は青年だよ」

私達は聲を上げて笑つた。

「この記念すべき日に、友あり遠方より來るだ。まづ一獻といふところだが、残念ながら
索寒貧だ」

國木田虎雄は、矢張り國木田虎雄である——と、平然たるものである。

「僕も租界に入つては、今日ばかりは素寒貧なんだよ」

「では、俺に任せろよ」

私は、國木田虎雄氏に兩替を頼んだ。國木田氏は會計のところへ行つたと思ふと、間もなく法幣を擱んで現れた。

「ぢや、羊肉でも御馳走しよう——ではねえ——御馳走にならう」

「だが、未だ時間が早やすぎるよ」

私は窓側に椅子をならべて、深い谿底の様な四馬路の雑踏を眺めながら、租界の性格を語る國木田氏の話に耳を傾けた。

私などには複雑怪奇としか思はれない租界の性格も、上海の住人から見れば、全く日常の茶飯事なのであらう。

例へば、日々使用する法幣にしても、十數種にも分れてゐて、ある種の紙幣などは、場所によつては全く使用できなかつたり、昨日まで日本軍票十圓に對し、銀ドル四、五元だつたものが、國際情勢のニュース一つで、一舉に三十元に落ちるなどといふこともあ

るといふのである。

金錢——兩替屋——にしても、大別すると三種類もあり、匯割莊といふのが、最も規模の大きなもので、一種の銀行とも言へるほどで、持主は上海金融業組合の會員になつてゐる。元字莊といふのは、金融業組合に加入してゐないが、上海ドルで百萬ドル程度の資本を左右してゐて、預金、當座、保險、貸付から、倉庫業、貿易にまで手を擴げてゐると云はれてゐる。

だが、錢莊の大部分は、上海の街を歩いて見ると、大通りは勿論のこと、狭い路地にも細い横町にも、到るところに仰々しい目印の旗を掲げて、店を開いてゐる。そんな店の中には、純然たる錢莊はなく、煙草や菓子を賣つてゐるのが、普通ださうである。

「なるほどね」

ちよつとしたデマ・ニュース一つで、一舉に十元、二十元と上下する貨幣價值——日本では、夢にも想像できないことが平然と行はれてゐる。

「毛唐の婆さんなどが、薄暗い錢莊に首を突つ込んで、磅のレットを聞いて、ちよいと眉



【美英倒打】で前の司公義大・地心中の路京南
動活の部道報軍陸るす布撒を單傳の

をすくめて、隣の店へ聞きに行くなんてのがザラなんだ。又、隣の店へ行くと、高いなんてことがあるんだから、不思議なんだよ」

私にはどれもこれも珍らしい話である。

「だが、アメリカ・マリン（米國海兵）なんて奴等が巾を利かしてゐたのも、一つには米弗が無闇に高かつたからだだよ。二三枚の米弗紙幣を投げ出せば、千弗以上になつたんだからね」

「アメリカ兵といふ奴は、物見遊山に支那へ来てゐたんだね。そして、結局は今朝のウエイクみために、危いを見ると、さつさと白旗を上げる。呆れたもんだ」

「……といふ譯さ。何事も世界第一、負けるのも世界第一。だが、まあ屋上へ出てみないか」

私達はエレベーターで、十七階の屋上へ上つて見た。屋上から見た上海の市街は、こたごたと無統制に、都市の美觀などを無視して、雑然と長江のデルタ地帯に、異様な姿をし、地平線の彼方にまで擴がり、冬の陽のなかで霞んでゐた。踏み躪ちられ、叩き潰され



【美英倒打】で前の司公義大・地心中の路京南
動活の部道報軍陸るす布撒を單傳の

をすくめて、隣の店へ聞きに行くなんてのがザラなんだ。又、隣の店へ行くと、高いなんてことがあるんだから、不思議なんだよ」

私にはどれもこれも珍らしい話である。

「だが、アメリカ・マリン（米國海兵）なんて奴等が巾を利かしてゐたのも、一つには米弗が無闇に高かつたからだよ。二三枚の米弗紙幣を投げ出せば、千弗以上になつたんだからね」

「アメリカ兵といふ奴は、物見遊山に支那へ来てゐたんだね。そして、結局は今朝のウエークみたいに、危いと見ると、さつさと白旗を上げる。呆れたもんだ」

「……といふ譯さ。何事も世界第一、負けるのも世界第一。だが、まあ屋上へ出てみないか」

私達はエレベーターで、十七階の屋上へ上つて見た。屋上から見た上海の市街は、こたごたと無統制に、都市の美觀などを無視して、雑然と長江のデルタ地帯に、異様な姿をし、地平線の彼方にまで擴がり、冬の陽のなかで霞んでゐた。踏み躪ちられ、叩き潰され

たやうな支那家屋の上に、近代建築の粹を凝らした數十階の、巨大な摩天樓の如きビルディングが、太陽の光を受けて、くつきりと上海の空に、明暗の色も鮮やかにそゞり立つて、聳えてゐる。

「あの摩天樓の一つ一つに、昨日まで米國旗が風に靡き、英國旗が翻へつてゐたんだぜ。俺なんかには、ちよいと夢のやうな氣がするよ」

租界に君臨してゐた米・英勢力を、まさまさと見せつけられ、身をもつて闘つて來た人達にとつて、今日のこの光景には、全く感慨無量なものがあるのであらう。

上海の歴史は——東亞の歴史は、日本の大きな力によつて、劃期的な旋回をしようとしてゐるのだ。

四階へ降りて來ると、多田君が待つてゐた。

「今夜、ちよいと會議がありますので失禮します。國木田さん、頼みますよ」

「あゝ、ううよ」

「それから、明日から租界の映畫館で、進駐ニュースを上映しますよ」

「租界の映畫館で……。ほほう、そいつは素晴らしい」

「何しろ絶対に間に合せるといつて、現場の連中は頑張ってますよ」

多田君は、では又明日、といつて出かけて行つた。

「進駐の時は、僕などは相當緊張したんだが、かう手際よく、堂々と接收が出来るとは思はなかつた」

「それはさうだよ。何しろ重慶系の反日銀行、ガス會社、電話會社、水道會社、米英系の銀行、商社、放送局、デパートからホテルに至るまで接收したんだが、映畫館なんかも、平常通り興行させるといふんだから、租界の治安も立派なものさ。しかし、明日から進駐ニュースを上映させるとは上出来だよ」

「なにか、餘りに平和的すぎてぼんやりするくらゐだね」

私達はハミルトン・ハウスを出た。

街頭には、まだ壁に貼られた布告に読みふける群衆が、後から後からと續いて、人の流れを、ところどころ堰きとめてゐる。

今朝、對日協同聲明を發表して、日本への協力を誓つた工部局の支那巡捕たちが、嚴めしい様子で、拳銃などをぶら下げて、所在なげに人波に押されて立つてゐる。

「新申報」の號外の速報が、街の壁や扉に、先刻よりはぐーんと數を層して貼られてゐる。華文なので、私などには充分に意味は分らないが、凡そ推察だけはつく。

(日軍航空部隊は眞珠灣を攻撃して、米國太平洋艦隊を撃滅した)

(日軍陸軍部隊は馬來半島に敵前上陸をし、目下戦果を擴大中なり)

そんな文字が、私達の眼に鋭く刺さつてくるのである。それにしても、上海の、この平和な街の姿は何んといふのだらう。人波の中に、白いターバンを巻いたシーク族の、あのもちやもちやの漆黒の髯をたくはへた印度人巡警が、巨軀を見せて悠然と街角につゝ立つて、交通整理をしてゐるのも平常の通りである。

日本軍の警備兵が行進して來ると、支那巡捕も、印度人巡警も道を譲り、このシーク族の巨人巡警などは、早くも擧手の禮をしたりなぞしてゐる。

新世界の邊りへ來た時に、黄褐色の軍用トラックが駛つて來た。見ると車上に大きなス

ピーカーがつけられてゐて、支那語で何か喚めいてゐる。何處から出て來たのか、見る見るうちに、支那の民衆がわつと、トラックを取圍んでしまつた。

宣傳の傳單が、パツと花瓣の様に投げられると、民衆は先を争つて拾ひ上げてゐる。自動車は傳單を撒き、放送を終ると、群衆を掻き分けるやうにして疾驅して行く。舗装された路上には、色とりどりの傳單が、ばらばらに散つてゐた。

私はその一枚を拾つて、泥を拂つた。

——廢除英美勢力、建設新東亞

美國といふのは、アメリカのことなのだ。どこから美などといふ文字を使ふのか分らないが、私達には、アメリカを指して美國などといふ文字を用ひるのは分らない気がする。

競馬場の塀が見えた。その入口のところに（〇〇ぶたい、まつもとたい）と書いた字が見えた。

華美電臺の前で、兵士の一人に、名刺を托した松本隊長はここにゐるのだらう。

「僕はちよつと知人を訪ねて來るよ」

國木田氏は、外で待つてゐるといふので、私は入口の歩哨に斷つて、競馬場へ入つて行つた。衛兵控所で訊ねると、

「只今外出中ですが、直ぐに戻られると思ひます」

残念だつたが、國木田氏に外で何時までも待つてもらふこともできないので、私は外へ出た。

「佛蘭西租界の方へ行つて見るか」

「佛蘭西租界へ入れるかな。今朝は鐵條網だの、バリケードを構へて、交通を遮斷してゐたけれど」

「なに、大丈夫だよ」

競馬場の横から、佛蘭西租界の方へ抜けて行つた、佛蘭西租界は、今朝ほどの物々しい警戒も解かれたのか。歩哨の姿もなく、どこが境界線なのか分らなかつた。

だが、この租界は米・英租界とは違つて、支那人の往來する姿も餘りなく、靜かで穩やかだつた。それは、全く別世界へ來たやうな感じを、われわれに與へる。

「ここがアベニュー・ジョツフルだよ」

マロニエの街路樹が、今はもう葉を落しかけてゐて、物さびた姿になつてゐるが、明るい陽の下を、ステツキをついた白髪の老人が、散歩をしてゐたり、犬を連れた女がハイヒールの音を、舗道に響かせて歩いてゐたりしてゐて、上海名物の黄包車の姿なども、この通りへ來ると、殆んど見掛けないのも不思議である。

霞飛路——このマロニエの街路樹の並んだ通りを、佛蘭西人達はアベニュー・ジョツフルと呼んでゐるのである。

佛蘭西流にアベニュー・ジョツフルと呼ぶのは、佛蘭西人達の望郷の所産であらう。

だが、霞飛路といふ支那流の文字も、なにかこの街らしい性格を現はしてゐさうである。

私達ものんびりと、店々の飾窓をのぞき込んだりしながら漫歩した。この街は、せかせかと歩いたり、大聲を出したり出來ないやうな、しつとりとした落着きを見せてゐる。

「さア、羊肉でも喰べるとしようか」

國木田氏の案内で、佛蘭西租界近くの、薄汚い料理店の、狭い階段を私達は上つて行

つた。

料理と白酒が、頭をてかてかに刺つた支那人のボーイに運ばれて來た。

私達は、白酒の盃を上げて、米・英撃滅戦の必勝のために祈つたのである。

歴史の轉期（二日目）

中華映畫の事務所には、活氣が溢れてゐた。川喜多副社長の部屋へは、支那映畫界の人達が頻繁に出入りしてゐる。

「張善根がやつて來たぜ」

振り向くと、茶褐色の洋服を着た六尺豊かな大男が、印度人のやうな赭黒い顔に、大きな眼を光らせて、副社長室へ忙ぎ足に入つて行つた。

多田裕計君の説明によると、

「上海の映畫製作會社は、昨日中にすつかり整備されて、今後は絶対に南京國民政府の命令で和平映畫を製作させ、資金なんかも、必要に應じて中華映畫から融通し、機械や俳優達も中華映畫の傘下に統括することになつたんですよ。映畫館なんかは、從來通り經營させて置きますが、上映する映畫の檢閲は、我々の手に握つてゐるんですから、これからは

日本系のニュースや文化映畫なんかも、どしどし上映することになるでせう」

そんな話をしながら、私達は窓から聞えてくるざわめきに氣がついて、谿底の様な四馬路を見下ろした。

「ほう、毛唐の行列だ」

私がここを訪れて來た時には、まだそんな光景は見られなかつたが、今、多田君の聲に誘はれて見下ろすと、このビルディング——ハミルトン・ハウスを取圍んで、外人の男や女が、ずらりと行儀よく一列に並んで、先頭はビルディングの入口に消えてゐるのである。

それは珍らしい光景だつた。

私にしても、生れてからこの方、こんなに澤山の外人を、一ヶ所に集めて見るのは始めてだつた。かうやつて見ると、外人の一人一人が、皆それぞれ違つた顔付をしてゐるのが、奇妙に見えてくる。

「驚いたね。こんなに敵國人がゐたんだね」

「こつちも感慨無量だが、奴等も感慨無量だらうな」

褐色、褐青色、茶色、金色、白銀色……と、彼等の頭を、上から見下ろしてゐると、頭髪だけでも、相當の種類に區別出来る。

「そりや眼色だつて、碧色、鳶色、灰色なぞと區別が出来るからね。奴等には日本人のやうな純粹性がないんだよ」

「容貌にしたつて相當な代物があるよ」

私達は勝手なことを話ながら、何時までも飽かずに眺めてゐた。外人の行列は、いつ果てるともなく、續々その數を加へて来る。それと共に氣付いたことだが、この外人の行列を、道路の向ふ側に立つて、呆然と見守つてゐる群衆がある。

支那人の一團なのである。ここからは、判つきり彼等の表情は分らないが、一ヶ所に立つたまゝ、凝つと動かない彼等の様子には、言ふべからざる零圍氣が漾つてゐるのである。

「出かけませんか」

晝近かい時間だつたので、多田君を誘つた。多田君も時計をのぞいて、身支度をした。

「出かせう」

エレベーターで一階へ下りて見ると、玄關横の一室が、我が憲兵隊の事務所になつてゐて、在上海の米・英人を出頭させて、登録の事務を執つてゐるのであつた。

「敵國人を登録させるぐらゐで、一ヶ所に集めて監視なんかしないんですかね」

「全く……奴等はアメリカなり、英國にゐる我々の同胞を、こんな風に扱ふか、僕は大きい疑問だと思ふ。自由だの、平等だのといふのは口先きばかりで、從來の支那、その他の植民地に對する侵略なんかから考へると、彼等の人道主義などといふものは、立派な假面なんだからね」

私達は、日本の堂々たる寛大な態度に、彼等を自由させて置いてもいいのかと、この外人達に憤懣すら感じさせられたのである。

ビルディングの表口へ出ると、私は先刻から氣になつてゐた道路の向ふ側に在つて、外人達の行列を見てゐる一團の支那人達の方へ進んで行つた。

いつ見ても、青黄色い支那人の顔は、際涯もなく廣い大陸のやうに、無表情だが、この

一團の支那人の顔には、微かながら奇妙な表情が浮んでゐた。的確に、これが彼等の心であるとは言へないが、彼等の心の奥にある表情は、かうとでも言ひ現はせるのではないかと、私には思はれる。

——これは果して本當なのだらうか。この行列をしてゐる外人達は、一昨日まで豪然と構へて、われわれを顧使してゐた外人達と同じ人種なのだらうか。いや、信じられない。だが、これは、確かにわれわれの上に君臨してゐた外人達に相違ない。全く奇妙なことがなつたものだ。外人達は日本などには負けない。勿論、租界には絶対に手を觸れさせはしないと言つてゐたが……。

私は彼等の表情から、彼等の心をかう解釋したのだが、この大陸的な國民の心は、私などの日本的な思考力とは違つてゐるのかも知れない。だが、人の世の中の興亡盛衰などには、太古の昔から馴らされてゐて、この外人の行列なども、ちよいとした見世物だとして考へてゐないのかもしれないのだ。

「何を感じて見てゐるんです」

「さや……」

「トリコロールへでも行きますか」

私達は南京路のレストラン・トリコロールへ行くことに一決した。トリコロールは日本系だけに、昨日も、今日も店を開けてゐて、その階上で、畫家の高橋忠彌君が個展をやつてゐた。私などには繪のことは分らないが、上海のスケッチばかりを描いた色彩感の豊かな繪は、溢れるやうな美しい詩情を感じさせて、心を穩やかにしてくれる。

レストラン・トリコロールは日支人で一杯で、腰をかける隙間もなかつたから、私達は畫廊への階段を上つた。

畫廊は閑散としてゐて、高橋君は一人で、窓側のソファで煙草をくゆらせてゐた。
「やあ、どうしました」

多田君は長身を屈めるやうにして、近づいて行つた。

「慌はてず騒がずですよ。昨日も個展をやつてたんですがね。勿論、誰一人として訪れる人もありませんでしたよ。ところが、ひよつこりと、黒絹の支那服を着て、支那靴をはい

た老人が見物に來ましてね」

「あの騒ぎの最中に……」

「さうなんです。『よろしいですか』と流暢な日本語で云ふと、靜かに一枚一枚見て廻つてゐたんですが、最後に『これを一枚買ひませう』と云つて、二百圓の繪を買つて行きました。あの少女の顔の繪なんです」

私は、その話を聞いてゐるうちに、色彩感の豊かな油繪ばかりあの部屋が、急に墨一色の南畫でも見るやうな閑寂な、潤ひのある靜けさに感じられたのだつた。

「いい話ですね。如何にも支那ですよ」

私達は異口同音に、さう言つた。——何か靜かな風景でも見るやうな感じがしたのである。

だが、硝子窓一重の外は、上海隨一の繁華街で、永安、先施、大新、新進公司などの各百貨店が、狭い道路の上にのしかゝるやうに建つてゐて、原色の色彩も生々しい廣告用の旗だの、幟だのが、秩序もなく下げられ、自動車、バス、電車、黄包車に、無軌道電車な

どが雜然たる音響を發して、都會の燥音を奏でてゐるのである。

その騒音に、私達の幻想は、一瞬にして見事に破壊されてしまふ。

「さあ、食事にしますか。高橋君、食事はどうです」

「僕はもうすませました」

「ちやあ……」

私は腰を浮かしかけて、窓の外を見た。私の眼に、窓の下の南京路の、車道の兩側に沿つて、陸戦隊の兵士達が、銃劍を肩に、四、五尺位の間隔を置いて、周囲の雜踏などには目もくれずに、整然と巡邏してゐるのが、力強く寫つた。

一昨日（七日）の夜などは、この附近などをぼんやり漫歩などしてゐられなかつた。それが今日は、あの妖しい雰圍氣などは、少しも感じられないのである。

私達が暢氣に話をしてゐる間にも、日本の逞しい力は、刻一刻と敵性租界を急速に變貌させつゝあるのだ。

それは誰人も拒むことの出來ない、日本の大きな力なのだ。大東亞建設の記念すべき無

血進駐が、上海租界に大きな歴史の變貌をもたらしたのだ。

數日後、私は長崎丸の甲板に立つてゐた。この長崎丸は、開戦の八日の朝、東支那海の朝靄を衝いて、天津に向ふ米國のプレシデンド・ハリソン號を發見した海鷲に協力し、同船を監視中、突如脱走を企てたハリソン號を猛追し、吳淞沖の淺瀬に乗り上げさせて、我が海軍に拿捕させた殊勳の船だつた。

この船の船長菅源三郎氏のこと、船客の話題になつてゐた。

「菅船長の長崎丸に乗れるとは光榮ですよ。何しろ殊勳の船ですからね」

黄浦江には、十二月の冷雨がしとしと降つてゐた。甲板の上から見ると上海には、又別の趣があつた。沿岸に並んだ巨大な建物、茶褐色のブロードウェイ・マンション、遠くにパーク・ホテルの尖塔のやうな建物が霞んで見える。

米・英色を奇麗に拂拭した上海は、新しい世紀の息吹きを受けて、大東亞の上海として甦らうとしてゐるのだ。

私はカール・クローの「花園の洋鬼」の最後の一節を、ふと思ひ出した。

——だが、私達の家であつた上海はもうないといふことを、私達は知つてゐる。色んな國から來た澤山の良い友人達は、仕事が滅茶苦茶になつたり、破産したりして、世界の隅隅へ散りぢりになつてしまつた。再び歸へつて來ない者も澤山あるだらう。

私達が避難者として、後に残して來た上海は、たゞ私達の追憶においてのみ生きることであらう。

洋鬼の時代は終つたのである。

その通りである。東亞に於ける西洋の惡魔どもの時代は、過去のものとなつてしまつたのだ。歐米人の上海はもうなくなつた。

東亞には新しい世紀への、逞しい進軍が開始されてゐる。そして、上海にも、世紀の曙が、強く明るく射してゐるのだ。

長崎丸は、船脚を速めて、黄浦江の濁流を蹴つて行く——。

私は甲板に立つて遠去かつて行く大陸を見つめてゐた。

——洋鬼の時代は終つたのである。だが、彼等の播いた悪魔の種は、さう簡単には一掃されさうにもない。しかし、われわれは飽くまでも、悪魔の種を一掃するために闘はねばならぬのだ。

私の脳裡には、いろんな支那人の顔が浮んで来る。

重慶を脱出して来たといふタイピストの顔。

香港へ逃避してゐる兄の安否を氣づかつて、その憂愁を青白い額に見せた陳素蘭の顔。

我々も東洋平和のために、日本の實力を認めねばならぬのだが——と、流暢な英語で語つた李の顔……。

だが、彼等の苦惱も、彼等の懷疑も、煩悶も、一切は歐米的なものから脱却して、東洋への復歸の、一時的な心の戦ひなのである。

船は、黄濁した揚子江の濁流の中を進んでゐる。

雨はまだ降りつゞいてゐる。

私の貧しい報告はこれで止めよう。だが、私は長崎丸の菅船長のことを、最後に附記しなければならぬ。

長崎丸は、昭和十七年五月十三日、長崎港外で不幸にも觸雷のために沈没した。

菅船長は、長崎丸沈没の責任を負つて、後始末の一段落した五月二十日に、東亞海運長崎支店の樓上で、日本の海員魂の烈しさ見せ、立派に自決を遂げられたのだつた。

それは、眞一文字に割腹し、頸動脈を掻切るといふ、古武士の切腹の作法にのみ見られる潔よさであつたと、検死官は語つてゐる。

私は長崎丸の一乗客として、謹んで菅船長の靈に哀悼の意を表させて頂く。

あとがき

この一篇の現地報告は、私の大陸への、いまだに消えやらぬ憧れの表現に過ぎません。機会あらば、もう一度、大陸へ渡りたいといふ希望を、私は今だにもつてゐます。何がそんなに、私の心を牽きつけるのかは、歴然とした形では、私にも分つてゐませんが、五千年の古い歴史と新しい世紀の曙光とが、揚子江の黄濁せる奔流のやうに、逆巻き、渦巻きしてゐる大陸の形相が、不思議な魅力を、私に感じさせるのだと、私はひそかに自問自答してゐます。

『十二月八日の上海』——といふ仰々しい表題で、この現地報告を發表するのは、私としまして、誠に意に添はず、いささか氣恥しさすら感ずるのですが、大東亞戦争勃發といふ歴史的な瞬間に、敵、米英の東亞侵略の根據地たる上海にゐて、全世界を震撼させた世紀の砲撃の一場面を目撃し、又、軍報道部の一員として、租界進駐に参加を許されたことが、私をして、敢へて此の文章を書かせることになつたのです。

昭和十六年九月に、文藝春秋社特派員兼従軍記者として、滿洲から北支、北支から中支へと歩いて來ました。この現地報告は、その中支の分のみを纏めたものです。中支での私の行程は、南京、蘇州、漢口、上海といふ順序だつたのですが、この本では、揚子江を南京から漢口へ遡江し、漢口から南京へ歸へり、蘇州を経て上海へといふやうに、揚子江を上流から下流へといふ風に編纂しました。従つて、時日の關係その他のことが前後してゐますが、その點はお断りいたします。

もちろん、僅かな日數を、たゞ漠然と大陸を歩いて來たに過ぎないのでから、私の大陸に對する觀察などは、全く取るに足らないものであることは、私自身も充分に承知してゐます。しかし、私は、私の見たまゝ、感じたまゝを、正直に誇張するところなく、ここに書きしるしました。しかし、ここに書かれてある支那は、どこまでも、大東亞戦争勃發直前の支那であることを、御承知願ひたいと思ひます。

その後の支那大陸は、どう變化してゐるだらうか——私の心の中に去來するものは、大東亞戦争勃發後の支那のことです。政治的にも、經濟的にも、大きな變動を受けてはゐるも

の、依然として蟠踞する重慶的思想との抗争は、いよいよ激しさを加へて行くのではないだらうか、と私は考へるのです。

不遜な言ひ方ですが、大東亞戦争を勝ち抜くことが、支那事變を處理することであり、支那事變を處理することが、大東亞戦争を勝ち抜くことであらうと思はれるのです。

最後に、この一篇の中に、今も東亞建設のために奮闘しつつある友人達の姓名を、そのまま記しましたことを深くお詫びいたしますとともに、出版に際しまして、多大の激勵鞭撻を頂きました知友諸君に、厚く感謝の意を表します。

昭和十八年二月

著者

昭和十八年三月二十日初版印刷
昭和十八年三月廿五日初版發行
(五、〇〇〇部)

(出文協承認)
あ370336號

十二月八日の上海

定價壹圓八拾錢

著作者 西川 光

發行者 鈴木吉平

印刷所 三光社印刷所

發行所 泰光堂

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

東京市下谷區御徒町三ノ八二
會員番號 一一六〇三四
振替口座東京六〇一六四
電話下谷(83)六二二四番

新銳皇民文藝叢書

岩下俊作著

長篇小説 秋廓寥

B 6 版二六二頁
定價一圓八十錢・千十五錢

大正九年頃から滿洲事變迄の、放恣なる自由主義と安易なる享樂主義の中にあつて而も尙それ等の風潮に禍ひされない清純な戀愛と、犠牲の精神を高潮した書下し長篇小説。

大庭さち子著

長篇小説 激浪をつく

B 6 版二七八頁
定價一圓八十錢・千十五錢

大東亞共榮圈建設のため邁進せんとする祖國と歩みを共にして、立ち上る一群の人々の生活を通して新しい日本の性格を創造せんとする作者會心の書下し長篇小説。

淺野武男著

長篇小説 朝靄

B 6 版二七二頁
定價一圓八十錢・千十五錢

不幸な環境に生ひ立つた一人の人間が、個人的な愛情を追ひ求めてゐた小さい巡禮の姿をかたぐり捨て國家への大いなる愛情に眼醒めるまでの人間記録を描く書下し長篇小説

964
159



版堂光泰

T. Miwa